学生による授業評価アンケート結果分析報告

大正大学　2017 秋

株式会社ディーシーアイ

本書面は、授業評価アンケートの結果分析を通じて、授業改善に向けた課題形成に資するデータを提供することを目的に起草したものです。評価項目間の相関から因果関係を探り、更なる授業改善への手がかりの特定を試みるとともに、過年度からの推移も把握のため必要に応じて比較データを掲載しています。

目次

1.　全体概況 ･･ 3

【考察】興味関心の向上を目指して･･ 5

2.　領域ごとの集計値にみる過去 4 回の推移とサマリー･･････････････････････････ 8

3.　項目別集計結果 ･･ 9

参考資料１　実施率／回収率･･ 23

1-1 アンケート実施率（回収率）科目区分別･･････････････････････････････････ 24

1-2 アンケート実施率（学部）　2005 年度春学期～2017 年度秋学期･･････････････ 25

参考資料２　自由記述回答　頻出キーワード分析･･････････････････････････････ 27

＜集計グラフ＞

自由記述回答 頻出キーワード分析について･･････････････････････････････････ 28

全学･･ 29

学部別･･ 30

回答人数帯別･･ 31

学年別･･ 32

出現率前回比較　全学･･ 33

出現率前回比較　学部別･･ 34

出現率前回比較　回答人数帯別･･ 38

出現率前回比較　学年別･･ 41

頻出キーワード別回答全文･･ 44

■全体概況

授業評価に際して採用した質問文と、それぞれの平均および標準偏差[1]は下表に示す通りです。無回答を除いた回答分布をもとに以下の方法で点数に換算してあります。

「5 そう思う」…5点、　「4 どちらかと言えばそう思う」…4点　「3 どちらともいえない」…3点
「2 どちらかと言えばそう思わない」…2点　「1 そう思わない」…1点

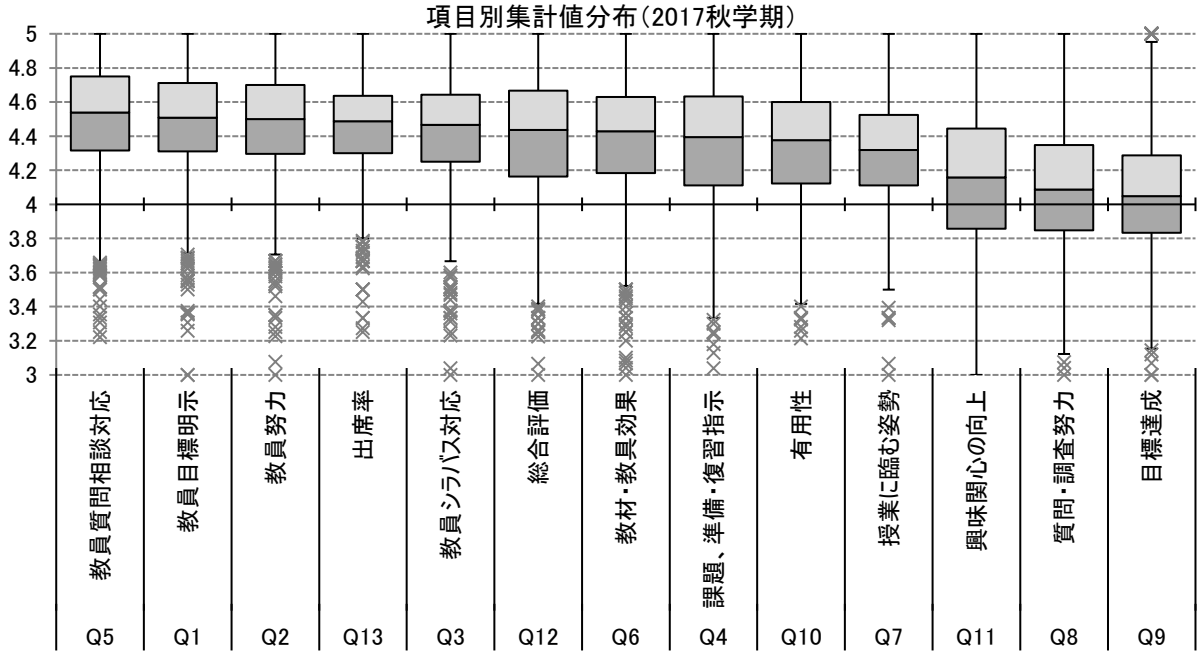
質問	質問内容		平均					標準偏差				
		年	17	16	15	14	13	17	16	15	14	13
Q1	教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した	春	4.47	4.46	4.47	4.47	4.49	0.33	0.34	0.33	0.34	0.29
		秋	4.49	4.47	4.48	4.51	4.52	0.32	0.34	0.35	0.32	0.31
Q2	教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ	春	4.48	4.46	4.47	4.47	4.49	0.33	0.34	0.34	0.34	0.30
		秋	4.48	4.47	4.48	4.51	4.52	0.32	0.34	0.35	0.31	0.31
Q3	教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った	春	4.43	4.40	4.41	4.39	4.41	0.33	0.35	0.33	0.33	0.31
		秋	4.43	4.41	4.41	4.44	4.45	0.32	0.33	0.34	0.32	0.31
Q4	教員は、この授業の課題、準備・復習をするよう具体的に指示した	春	4.35	4.32	4.32	4.33	—	0.40	0.41	0.40	0.40	—
		秋	4.35	4.35	4.35	4.36	—	0.38	0.40	0.40	0.39	—
Q5	教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた	春	4.51	4.49	4.50	4.50	4.53	0.33	0.36	0.35	0.35	0.31
		秋	4.50	4.51	4.51	4.54	4.56	0.33	0.35	0.36	0.33	0.32
Q6	教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった	春	4.40	4.37	4.39	4.37	4.39	0.36	0.38	0.36	0.38	0.34
		秋	4.39	4.37	4.39	4.42	4.44	0.36	0.38	0.38	0.35	0.34
Q7	私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ	春	4.31	4.28	4.27	4.26	4.27	0.33	0.34	0.33	0.35	0.33
		秋	4.31	4.28	4.28	4.30	4.29	0.32	0.34	0.35	0.32	0.33
Q8	私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた	春	4.07	4.00	4.00	3.99	3.99	0.38	0.42	0.40	0.41	0.41
		秋	4.10	4.04	4.06	4.07	4.07	0.37	0.42	0.42	0.40	0.41
Q9	私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）	春	4.05	4.00	4.00	3.97	3.99	0.35	0.38	0.36	0.37	0.37
		秋	4.06	4.02	4.03	4.06	4.05	0.35	0.37	0.38	0.36	0.38
Q10	私がこの授業で得たものは、今後の学習活動や人生に活きる	春	4.35	4.33	4.34	4.31	4.34	0.36	0.38	0.36	0.38	0.35
		秋	4.35	4.34	4.36	4.37	4.39	0.35	0.37	0.37	0.35	0.35
Q11	私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった	春	4.12	4.09	4.14	4.10	4.16	0.45	0.49	0.45	0.48	0.42
		秋	4.12	4.12	4.15	4.17	4.24	0.45	0.47	0.45	0.43	0.42
Q12	全体として、この授業を受けてよかった	春	4.39	4.36	4.38	4.36	4.41	0.39	0.41	0.40	0.43	0.36
		秋	4.39	4.38	4.39	4.42	4.46	0.39	0.41	0.41	0.38	0.37
Q13	あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか	春	4.53	4.52	4.56	4.59	4.59	0.29	0.28	0.25	0.26	0.25
		秋	4.45	4.46	4.49	4.51	4.51	0.28	0.28	0.29	0.28	0.26
Q14	この授業のための課題、準備・復習に何時間取り組みましたか	春	2.86	2.88	2.78	2.85	—	0.57	0.61	0.65	0.65	—
		秋	2.95	2.96	2.83	2.91	—	0.62	0.66	0.68	0.67	—
全質問合計（Q13、Q14 を除く）		春	4.33	4.30	4.31	4.29	4.32	0.31	0.33	0.32	0.33	0.30
		秋	4.32	4.31	4.33	4.35	4.36	0.31	0.33	0.34	0.31	0.31

[1] 表中の数値「平均」及び「標準偏差」は、授業ごとの評価集計値を元に算出したものです。別紙集計報告書では区分毎の回答から直接計算を行っているため計算結果は一致しません。なお、2013 年度以前は質問設計が異なりますので、全質問合計は参考値としてご覧いただければ幸いです。

昨年同時期（2016 秋学期）との比較では、Q8 質問・調査努力、Q9 目標達成、Q7 授業に臨む姿勢の 3 項目で統計的に有意な平均値の上昇が見られました。いずれの項目も下の四分位図（中央値で左から降順ソート）では右寄りに位置しており、相対的に低調だった項目で改善が進んだことになります。平均に下降が見られた項目もありますが、その差に有意性はありません。とりわけ、Q13 出席率、Q5 教員質問相談対応は以前から高い評価を維持しており、「高止まり」とみるのが妥当です。Q14 平均学習時間に改善は見られず、後退している可能性も否定できません。改めて有効な改善策を講じる必要がありそうです。

昨年同時期比較	2016 年度秋学期		2017 年度秋学期		母平均の差	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	変動	t検定P値
Q8 質問・調査努力	4.043	0.416	4.098	0.374	+0.056	0.0005 **
Q9 目標達成	4.024	0.374	4.058	0.346	+0.034	0.0136 *
Q7 授業に臨む姿勢	4.282	0.342	4.312	0.324	+0.030	0.0179 *
Q3 教員シラバス対応	4.410	0.326	4.426	0.324	+0.016	0.1286
Q1 教員目標明示	4.471	0.341	4.485	0.324	+0.015	0.1500
Q6 教材・教具効果	4.374	0.382	4.389	0.361	+0.015	0.1776
Q10 有用性	4.340	0.374	4.349	0.347	+0.009	0.2739
Q2 教員努力	4.468	0.343	4.477	0.321	+0.009	0.2644
Q12 総合評価	4.382	0.409	4.390	0.393	+0.008	0.3308
Q4 課題、準備・復習指示	4.345	0.403	4.352	0.383	+0.007	0.3380
Q11 興味関心の向上	4.119	0.472	4.122	0.451	+0.003	0.4383
Q13 出席率	4.459	0.276	4.455	0.281	−0.004	0.3622
Q5 教員質問相談対応	4.508	0.347	4.503	0.327	−0.005	0.3592
Q14 平均学習時間	2.955	0.662	2.945	0.622	−0.010	0.3574

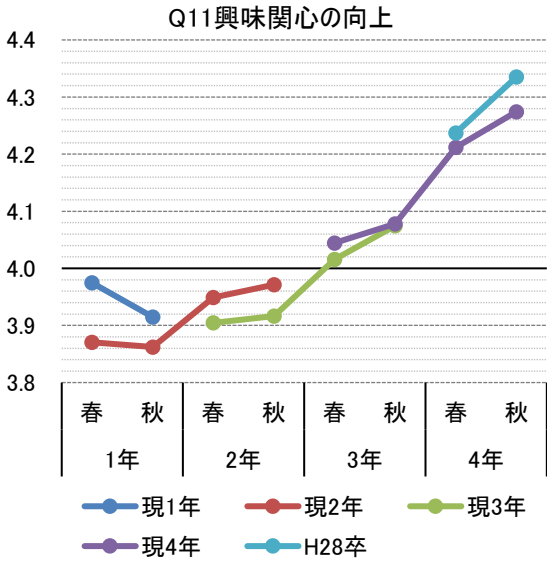
n=1,072（16 秋）、1,096（17 秋）　有意性の検定　*：P<0.05、**：P<0.01



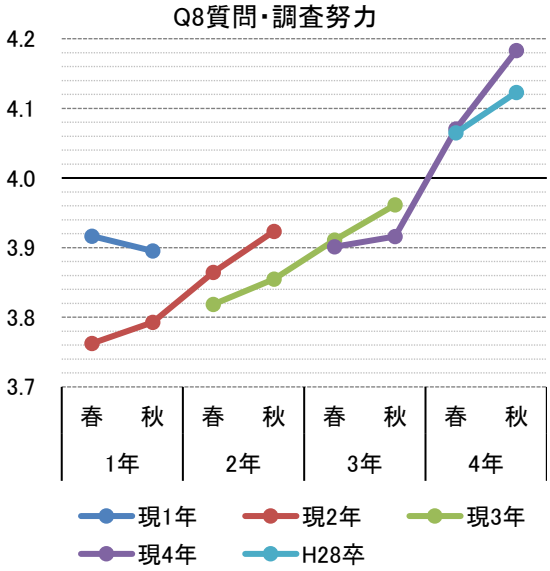
相対的に低位でありながら、全学での改善があまり進んでいないように見えるのは、Q11 興味関心の向上です。この項目を目的変数とする重回帰分析を行ったところ、Q12 総合評価を除く全項目の偏回帰係数は右表（降順ソート）の通りです。Q10 有用性が突出して高く、2 番目は Q9 目標達成です。「この授業で得たものが今後の学習生や人生に活きる」との認識を持たせるには、その場面を直接・間接に経験させる必要があります。授業内外に「自分との関りを認識できる（＝自分ごととしての）課題」を用意し、授業で学んだことを用いて解決に挑ませることが必要と考えられます。その場面で、自分なりの解が導けた／学びを経てより良い答えを作れたと実感できれば、授業の到達目標を達成したとの認識にも繋がり、Q9 目標達成との相関も一段と高まるはずです。

×Q11 興味関心の向上	偏回帰係数
Q10 有用性	0.4170
Q9 目標達成	0.2572
Q6 教材・教具効果	0.1787
Q8 質問・調査努力	0.0991
Q7 授業に臨む姿勢	0.0636
Q14 平均学習時間	0.0235
Q2 教員努力	0.0560
Q1 教員目標明示	0.0307
Q5 教員質問相談対応	0.0210

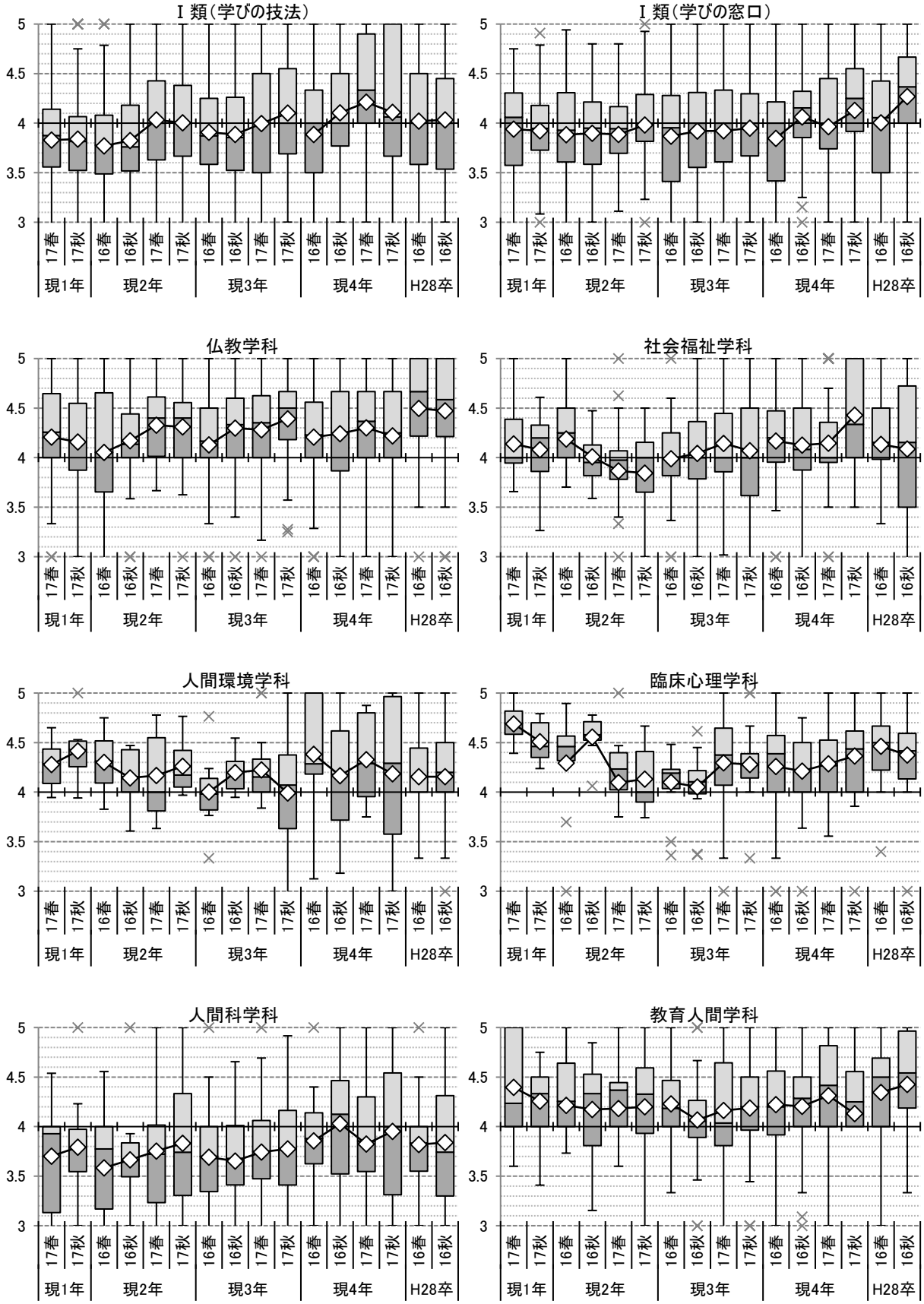
学年を追って集計値の変化をみると、右図のような結果になりました。学年・学期が進むごとに数値が伸びていく傾向が見られますが、現 1 年、現 2 年はそれぞれ 1 つ上の学年の 1 年前を上回る推移となっています。いずれも母平均の差に統計的な有意性（t 検定 P 値が 0.001 未満）が確認できます。昨年度以来重ねてきた教育改善が徐々に成果をあげていることを表す結果と思われます。



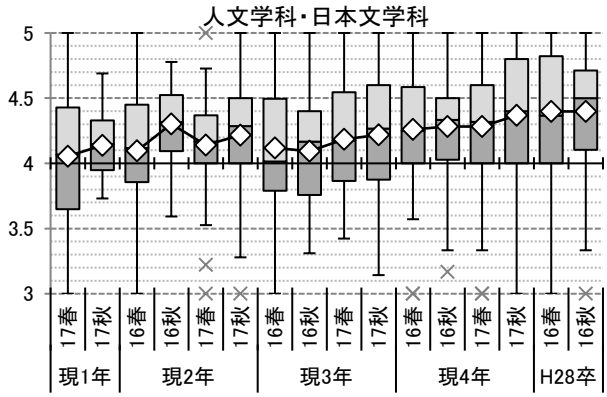
なお、Q8 質問・調査努力においても同様の傾向が見られます。Q11 興味関心の向上と異なり、こちらはすべての学年で昨年同時期の結果を上回っています。興味関心の向上が引き金となって、質問調査努力を引き上げたという部分もあろうかと思いますが、逆方向の因果として、わからないことを質問したり調べたりして解消に努める中で興味関心を見出すきっかけを得たという見方もできそうです。いずれにせよ、学生が興味関心を持って、主体的に学ぶ姿勢を獲得しつつあるのは間違いなさそうです。改善の歩をここで止めることのないよう、当期の指導において何が奏功したのか、改善の理由を言語化しておく必要があろうかと存じます。

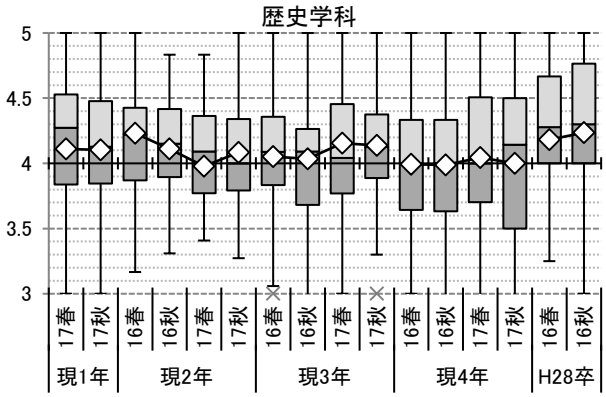


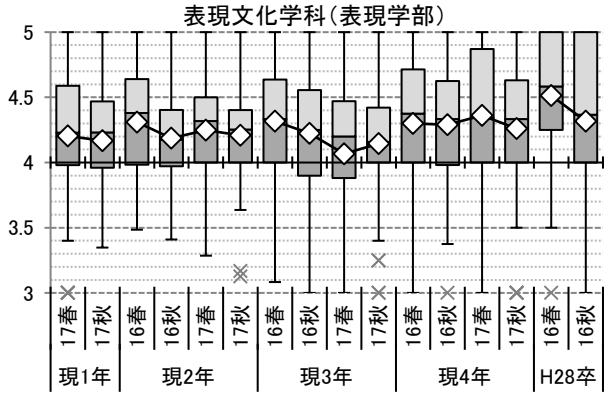
Q11 興味関心の向上における科目区分別、履修者の学年ごとの集計値分布（過去 4 回追跡）

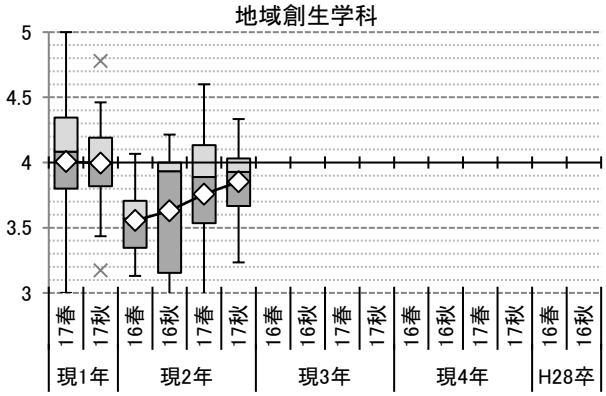


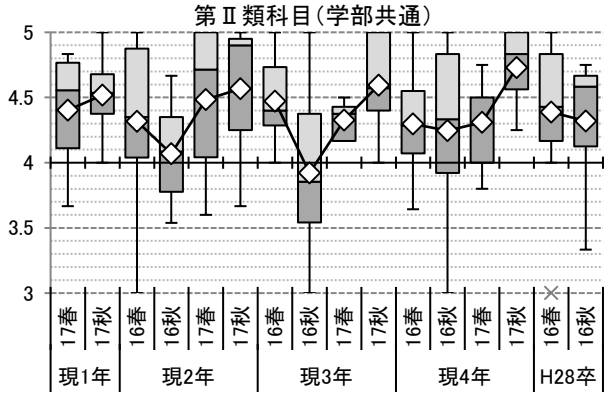
※科目区分「心理社会学部共通」は、対象授業数が少ないためグラフを非表示としてあります。

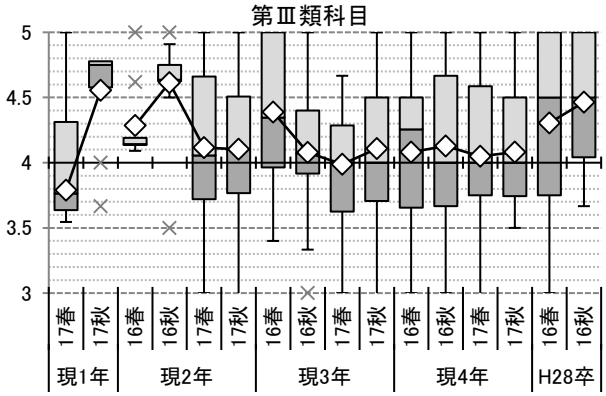

人文学科・日本文学科
5
4.5
4
3.5
3
17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋
現1年 現2年 現3年 現4年 H28卒

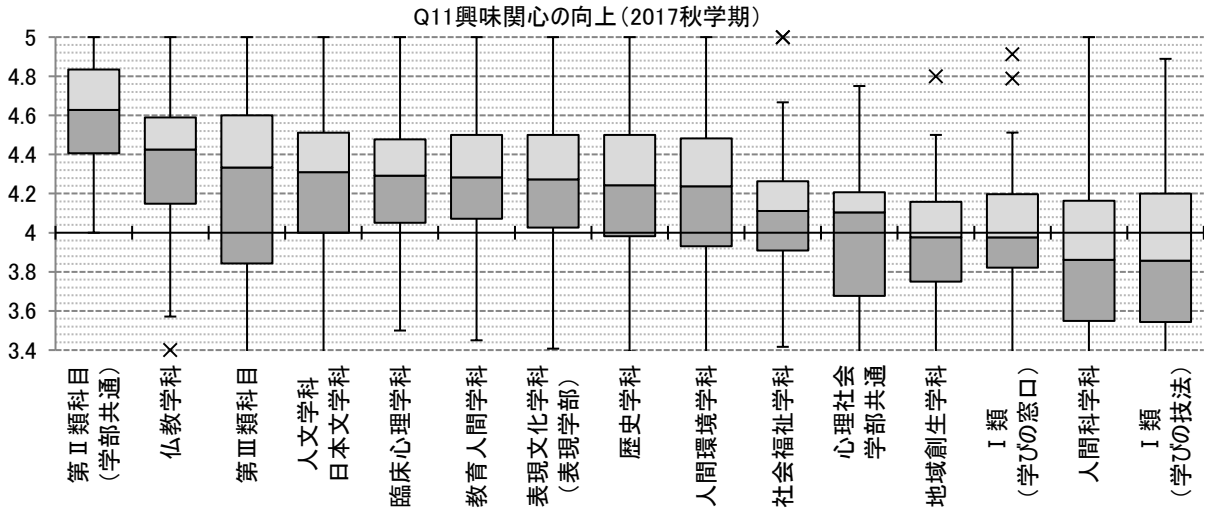

歴史学科
5
4.5
4
3.5
3
17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋
現1年 現2年 現3年 現4年 H28卒

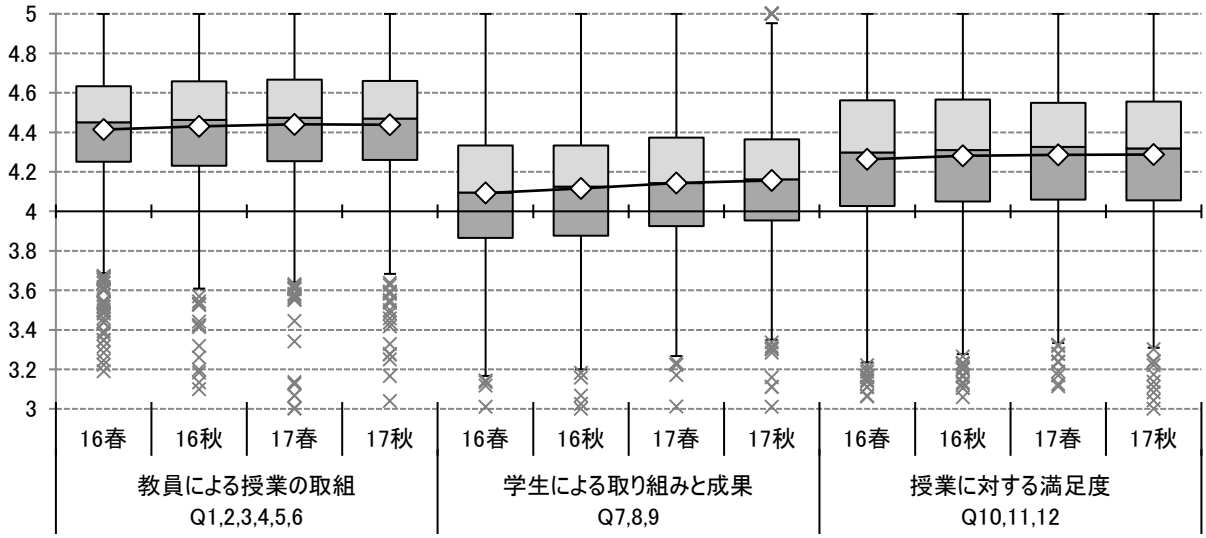

表現文化学科（表現学部）
5
4.5
4
3.5
3
17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋
現1年 現2年 現3年 現4年 H28卒


地域創生学科
5
4.5
4
3.5
3
17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋
現1年 現2年 現3年 現4年 H28卒


第Ⅱ類科目（学部共通）
5
4.5
4
3.5
3
17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋
現1年 現2年 現3年 現4年 H28卒


第Ⅲ類科目
5
4.5
4
3.5
3
17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋 17春 17秋 16春 16秋
現1年 現2年 現3年 現4年 H28卒


Q11興味関心の向上（2017秋学期）
5
4.8
4.6
4.4
4.2
4
3.8
3.6
3.4
第Ⅱ類科目（学部共通）
仏教学科
第Ⅲ類科目
人文学科 日本文学科
臨床心理学科
教育人間学科
表現文化学科（表現学部）
歴史学科
人間環境学科
社会福祉学科
心理社会学部共通
地域創生学科
Ⅰ類（学びの窓口）
人間科学科
Ⅰ類（学びの技法）



「教員による授業への取り組み」（Q1、Q2、Q3、Q4、Q5、Q6）

過去 4 回の集計では中央値[2]（グレーの濃淡の境界）が 4.45→4.46→4.47→4.47、第一四分位数（箱の下端）が 4.25→4.23→4.25→4.26 と推移しており、安定した高得点と言えます。しかしながら、下方のひげ[3]の外には統計的に外れ値となる授業（×で表示）も少なからず残っており、4.0 ポイント未満の授業は現時点でもなお全授業の 7.8%を占めています。

「学生による取り組みと成果」（Q7、Q8、Q9）

中央値は前回の 4.14 を上回る 4.16 です。箱の下端にも上昇が見られ、4.0 ポイント到達率は、62.1%→63.9%→67.7%→70.0%と着実に高まってきています。前述の通り、昨年同時期との比較では、Q8 質問・調査努力、Q9 目標達成、Q7 授業に臨む姿勢にはいずれも統計的に有意なプラスの変化がありました。Q8 質問・調査努力は、学生自身が解消すべき疑問を見出し、その解消法を獲得する機会の整備が進んだことを伺わせます。「学びの姿勢とその方法の獲得」がさらに大きく進展することを期待させる結果と言えますが、4.0 ポイント未満となった約 3 割の授業でのキャッチアップをどのように支援するか今後の検討が必要です。

「授業に対する満足度（学びの成果）」（Q10、Q11、Q12）

平均値は前回と同じ 4.29 ですが、4.0 ポイント未満の授業は前回の 21.2%から 19.8%に僅かながらも減少しました。前回の報告でも申し上げましたが、「学生による取り組みと成果」の各項での改善の成果が Q10～Q12 の各項目を押し上げるには、一定のタイムラグがあると思われます。前述の通り、Q11 興味関心の向上では、1 年生、2 年生で既に改善の様子が見られます。科目の学習内容と自分との関りを認識できる機会を確保した上で、授業の到達目標を着実に達成させることが、Q10～Q12 での更なる改善をもたらすはずです。

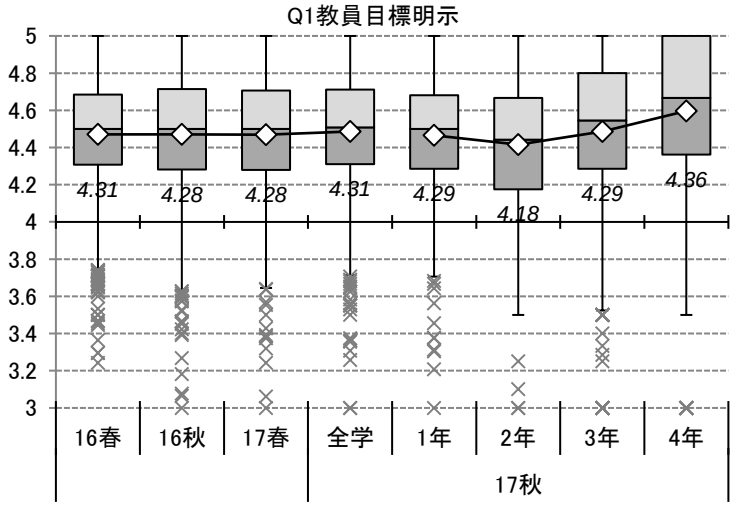
[2] ◇は平均値です。また、箱の上端は第三四分位数、下端は第一四分数を表し、ひげの先端が最大値と最小値を表します。以下、特に断りのない場合、四分位図のすべてについてこのルールを適用いたします。

[3] ひげの長さは 1.5IQR（四分位範囲の 1.5 倍）を上限として設定しました。

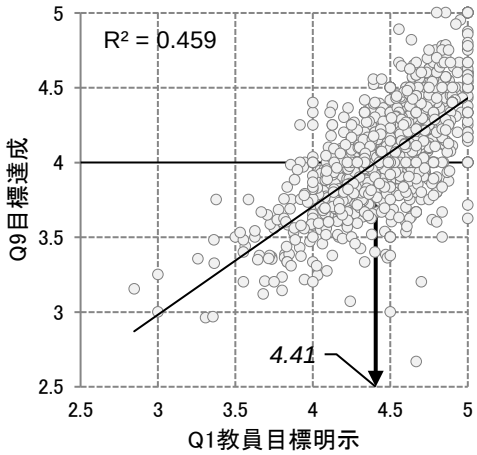
■項目別集計結果分析

各項目に表示した図表は、授業別集計の分布を直近 4 回分の追跡、および当期の学年別で表示した四分位図と、他項目との単相関・偏相関の一覧です。四分位図において「箱」のすぐ下に表示した数字は第 1 四分位数です。この値未満の場合、集計区分内で下位 25%に含まれることになりますので改善を急ぐ必要があります。また、単相関と偏相関の双方について各々の相関行列全体で上位 25%に含まれる場合にそれぞれ網掛を施しました。因果の方向や第三要素の介在など考慮しなければならないこともありますが、基本的には、高相関で結ばれる項目はそれぞれ別に改善を図るよりもセットにして考えた方がうまく改善が運ぶケースが多いように思われます。

Q1　教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した

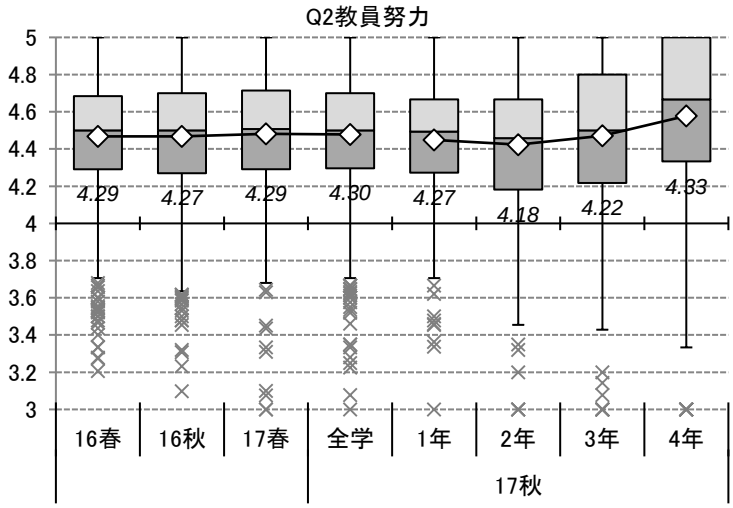


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示		
Q2教員努力	.796	.398
Q3教員シラバス対応	.713	.201
Q4課題、準備・復習指示	.634	.121
Q5教員質問相談対応	.684	.080
Q6教材・教具効果	.681	.060
Q7授業に臨む姿勢	.565	.029
Q8質問・調査努力	.467	−.032
Q9目標達成	.507	.040
Q10有用性	.579	.030
Q11興味関心の向上	.528	−.004
Q12総合評価	.619	.053
Q13出席率	.189	−.007
Q14平均学習時間	.190	.010



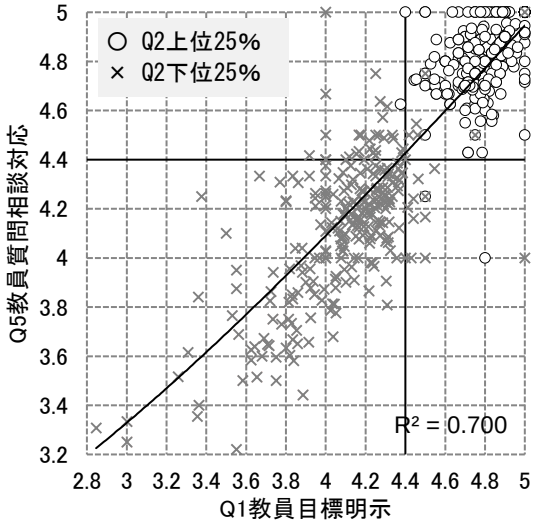
Q1 教員目標明示「教員は、この授業の到達目標をはっきりと示した」は、引き続き高い評価を得ていますが、4.0ポイント未満の授業が今もなお6.6%残っています。右の散布図に見る通り、Q1 教員目標明示が 4.0 ポイント未満に止まりながら Q9 目標達成で 4.0 ポイント以上に達する授業は極めてまれ（今回は 3 件）です。学生の視点で達成が検証できる表現で到達目標をシラバスに記述したうえで、授業内でも頻繁に言及すれば、少なくとも「どちらかと言えばそう思う」に相当する 4.0 ポイントには到達できるはずです。定性的な記述ではその要件を満たさないようであれば、学期を終えて解くべき課題をもって到達目標を提示するという手もあります。レポートの課題を提出期限とともに授業開きで提示する方法を採り、大きく改善を図れたケースもあります。なお、近似線を大きく下回るようなら、Q9 と高相関にある他の項目に達成を妨げている要素（ボトルネック）が存在するはずですので、その項目での改善を図ることが先決です。

Q2　教員は、学生がその目標を達成できるよう、意欲的に取り組んだ

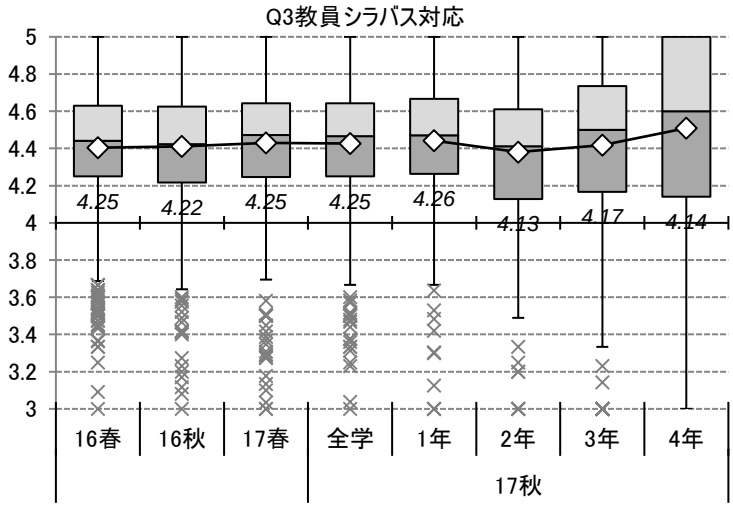


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.796	.398
Q2教員努力		
Q3教員シラバス対応	.730	.204
Q4課題、準備・復習指示	.638	.057
Q5教員質問相談対応	.732	.211
Q6教材・教具効果	.723	.144
Q7授業に臨む姿勢	.586	.054
Q8質問・調査努力	.480	−.015
Q9目標達成	.508	−.021
Q10有用性	.598	.024
Q11興味関心の向上	.548	−.005
Q12総合評価	.648	.089
Q13出席率	.202	.012
Q14平均学習時間	.173	−.037

箱の下端（第 1 四分位数）は 4.30 まで上昇してきましたが、4.0 ポイント未満の授業がまだ 6.8%残っています。この項目との間で高い偏相関を示している 3 項目の関係を調べてみると、右の散布図のようになります。Q2 教員努力で上位 25%の評価を得ている授業では、Q1 教員目標明示、Q5 教員質問相談対応の 2 項目ともに 4.4 ポイントを超える領域に集中しており、いずれか一方だけを改善しても、「学生が目標を達成できるよう意欲的に取り組んだ」との評価にはなりにくいと言えそうです。



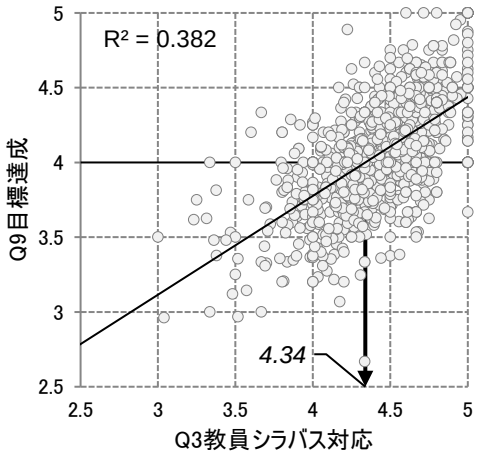
Q3　教員は、シラバスに記載された内容を適切に扱った



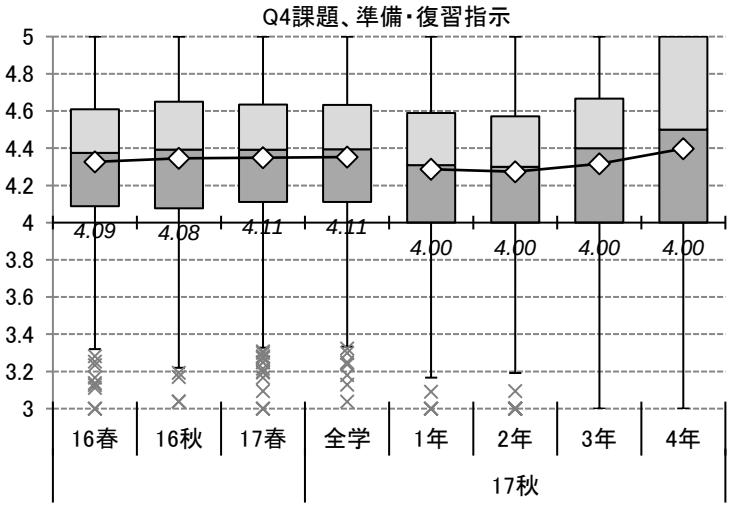
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.713	.201
Q2教員努力	.730	.204
Q3教員シラバス対応		
Q4課題、準備・復習指示	.627	.164
Q5教員質問相談対応	.660	.086
Q6教材・教具効果	.675	.152
Q7授業に臨む姿勢	.538	.037
Q8質問・調査努力	.440	−.036
Q9目標達成	.478	.033
Q10有用性	.545	.033
Q11興味関心の向上	.487	−.020
Q12総合評価	.570	.000
Q13出席率	.187	.021
Q14平均学習時間	.161	−.039

前 2 項と同様に 2 年生がやや低調ですが、全体としては概ね良好な状態かと思われます。4.0 ポイント未満の授業は全体の 7.7%であり、該当する場合、シラバスを起草する段階での計画に見落

としや練り込みの不足があるものと思われます。前回も申し上げましたが、シラバスを起草する段階で授業毎の教材、資料、進め方、学生の活動などがきちんと想定されていないと、途中での変更を余儀なくされ、シラバスに記載された内容を適切に扱うことができなくなります。学期や年間を通した指導計画の完成度を高めることが両者の改善を加速させるはずです。「何を教えるか」という教授内容を指導カレンダー上に配列する前に、「学生にどんな課題を与えるか／挑ませるか」の検討を先行させることが合理的で実行可能な指導計画を作る上で欠かせません。

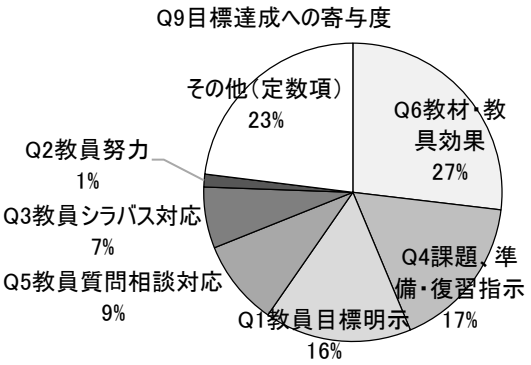


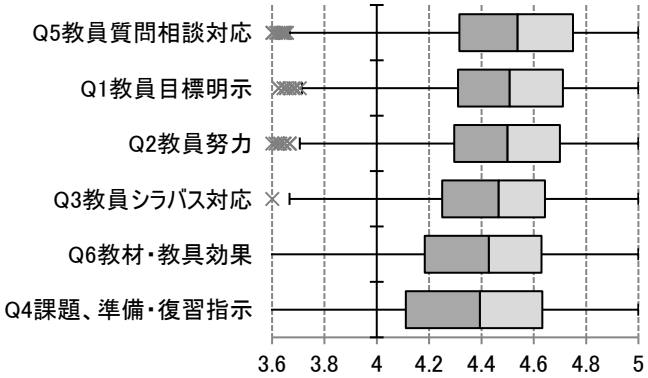
Q4　教員は、この授業の課題、準備・復習をするよう具体的に指示した



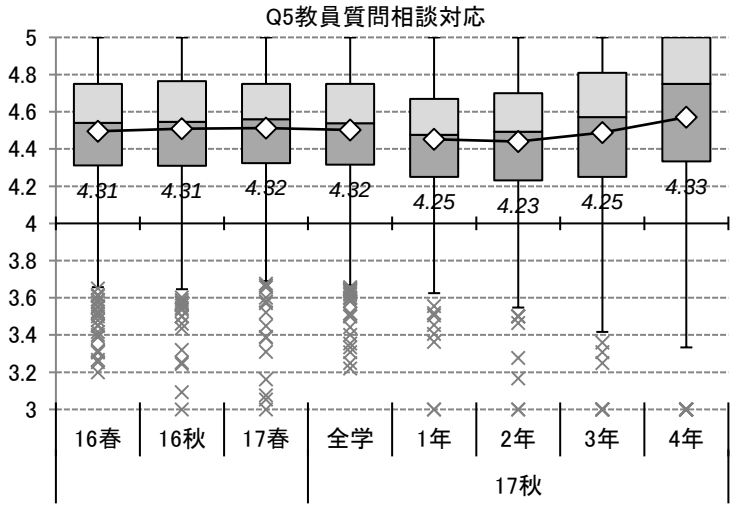
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.634	.121
Q2教員努力	.638	.057
Q3教員シラバス対応	.627	.164
Q4課題、準備・復習指示		
Q5教員質問相談対応	.656	.214
Q6教材・教具効果	.619	.096
Q7授業に臨む姿勢	.523	−.010
Q8質問・調査努力	.522	.155
Q9目標達成	.479	.000
Q10有用性	.519	.028
Q11興味関心の向上	.465	−.042
Q12総合評価	.526	−.016
Q13出席率	.152	−.036
Q14平均学習時間	.287	.155

春学期とほぼ同じ結果です。「教員による授業への取り組み」に区分される Q1～Q6 のうち、Q9 目標達成への寄与度で 2 番目に位置しながら中央値は最も低いままです。全体の 17.4%を占める 4.0 ポイント未満の授業では、思い切った改善を図る必要があると思われます。「具体的な指示」には、課題・準備・復習の内容以外にも、その取り組み方も含まれるはずです。授業内で土台となる知識・理解を形成した上で、実際に手を動かしたり、話し合いで解決策への発想を拡張したりする場面を作ることで、授業外学習に取り組む方法を学ばせておくことも重要と考えます。





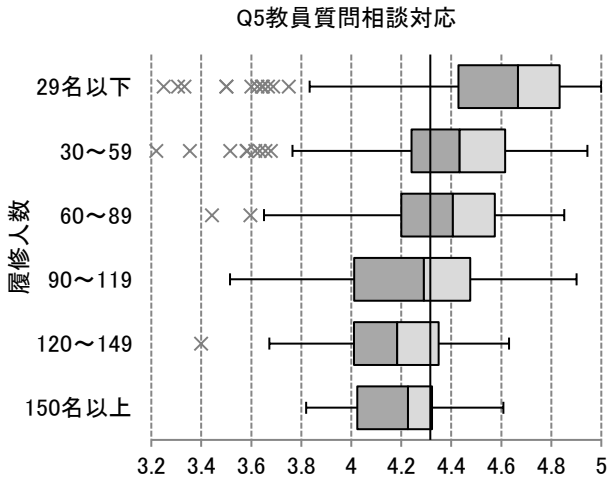
Q5　教員は、学生からの質問や相談に十分に応じる姿勢を示していた

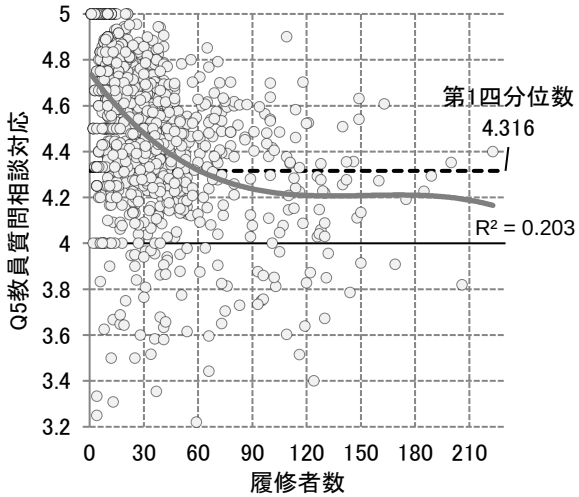


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.684	.080
Q2教員努力	.732	.211
Q3教員シラバス対応	.660	.086
Q4課題、準備・復習指示	.656	.214
Q5教員質問相談対応		
Q6教材・教具効果	.708	.212
Q7授業に臨む姿勢	.561	.025
Q8質問・調査努力	.495	.061
Q9目標達成	.488	−.032
Q10有用性	.569	.019
Q11興味関心の向上	.522	−.012
Q12総合評価	.611	.065
Q13出席率	.192	.019
Q14平均学習時間	.181	−.040

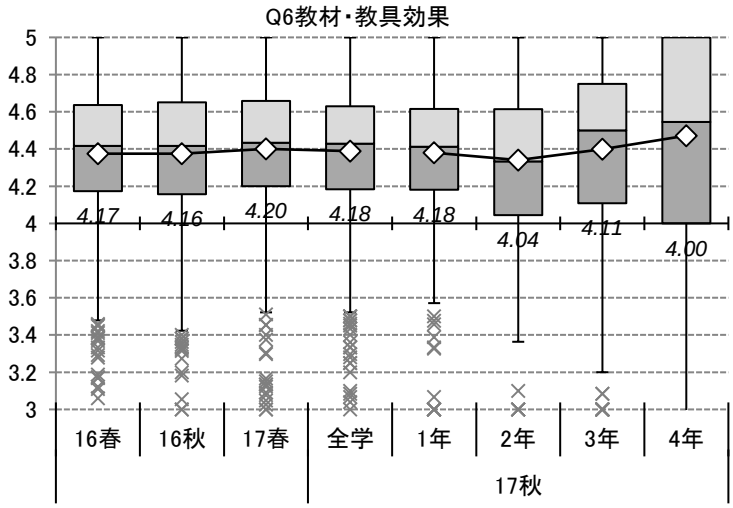
引き続き、総じて高い評価を維持しています。4.0 ポイント未満の授業は 6.7%に過ぎません。右下表は履修人数との相関係数の一覧です。Q5 教員質問相談応答は昇順で並べたときに上位 3 番目に位置しており、履修人数が多くなるほど集計値が下がりやすい項目であるのは確かですが、下の四分位図に示す通り、履修人数が 150 名を超える授業での集計値でも箱の下端は 4.0 ポイントを超えており、全体の第 1 四分位数に相当する 4.32 を超える授業も存在しています。教室規模に応じた対応方法があるということではないでしょうか。一方、29 名以下という比較的小さい規模での授業でも如上の 4.32 に届かない授業もあり、履修人数だけを理由にはできません。Q6 教材・教具効果との相関も高めです。学生の質問や相談に応じる中で不明の発生個所は興味の所在を把握できれば、授業設計に反映させることもできるはずです。

相関係数（×履修人数）	単相関	偏相関
Q8 質問・調査努力	−0.448	−0.157
Q4 課題、準備・復習指示	−0.415	−0.155
Q5 教員質問相談対応	−0.410	−0.146
Q12 総合評価	−0.355	−0.086
Q14 平均学習時間	−0.346	−0.050
Q7 授業に臨む姿勢	−0.366	−0.038
Q10 有用性	−0.339	−0.021
Q1 教員目標明示	−0.322	0.018
Q2 教員努力	−0.329	0.026
Q11 興味関心の向上	−0.294	0.034
Q13 出席率	−0.046	0.064
Q6 教材・教具効果	−0.280	0.092
Q9 目標達成	−0.284	0.095
Q3 教員シラバス対応	−0.192	0.145

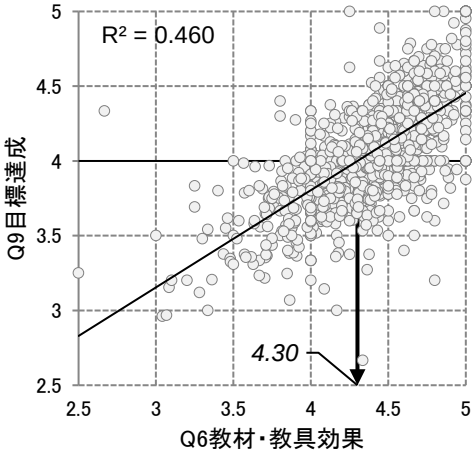




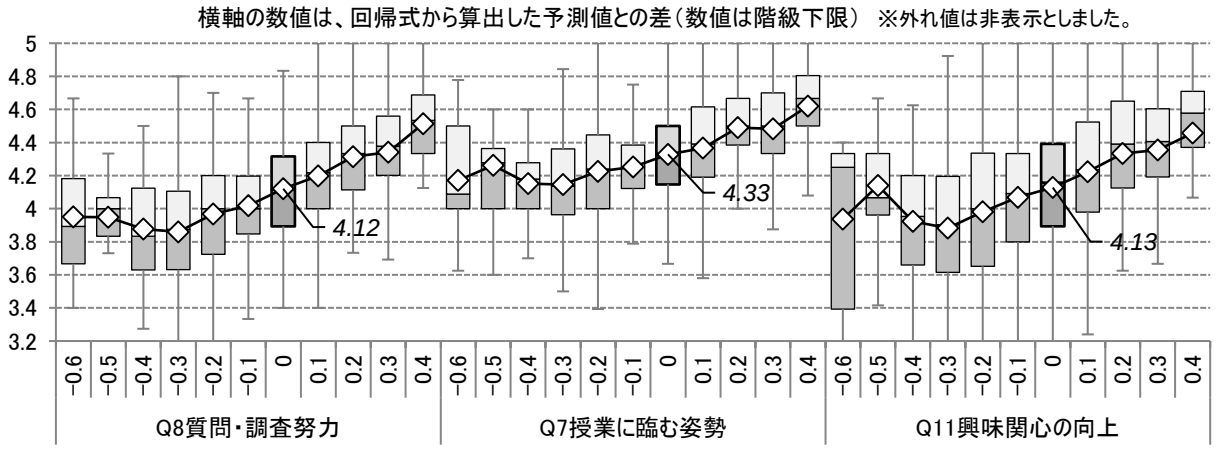
Q6　教材や教具は適切であり、授業理解を深める上で効果的であった



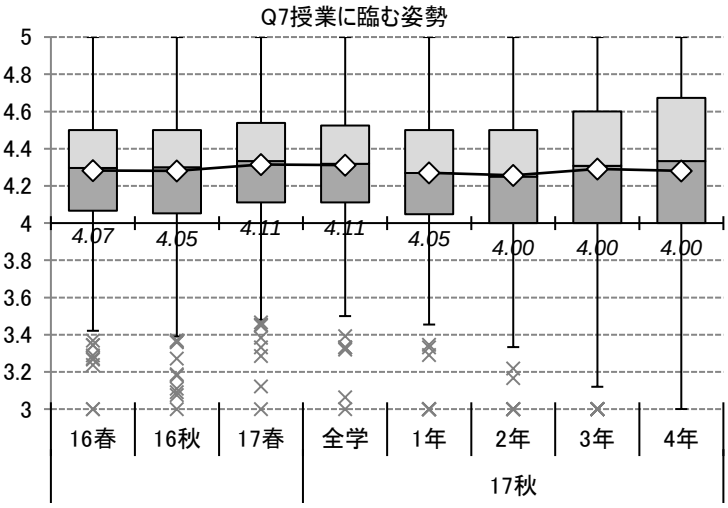
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.681	.060
Q2教員努力	.723	.144
Q3教員シラバス対応	.675	.152
Q4課題、準備・復習指示	.619	.096
Q5教員質問相談対応	.708	.212
Q6教材・教具効果		
Q7授業に臨む姿勢	.605	.096
Q8質問・調査努力	.501	−.027
Q9目標達成	.539	.020
Q10有用性	.620	.049
Q11興味関心の向上	.597	.081
Q12総合評価	.669	.117
Q13出席率	.175	−.058
Q14平均学習時間	.187	−.034



春学期をわずかに下回りました。昨年同期時比較では箱の下端や中央値に小幅ながら上昇が見られますが、4.0 ポイント未満の授業は全体の 11.2%にのぼり、該当する授業での改善を加速させる必要があります。一方、近似線が Q9 目標達成 4.0 ポイントと交差する 4.3 ポイントに達しながら Q9 目標達成で 4.0 ポイントに未達の授業も少なくありません。授業内容の理解に支障がなくても、必ずしも授業の到達目標が達成できるとは限らないということです。近似線からの距離（残差）を目的変数、Q6 と Q9 を除く他の全項目を説明変数とする重回帰分析の結果、偏回帰係数に統計的な有意性が見られたのは、Q8 質問・調査努力（偏回帰係数.401）、Q7 授業に臨む姿勢（同.239）、Q11 興味関心の向上（同.130）の 3 項目であり、とりわけ Q8 質問・調査努力が突出して高い値です。Q8 質問調査努力で 4.12 ポイント以上なら残差はプラスに転じる計算です。この結果は、不明を残すことなく学習内容を理解させるだけでなく、適切な課題を与えて学生自らが不明の所在に気づきその解消に向けた行動を取れるように導くことの必要性を示していると考えられます。

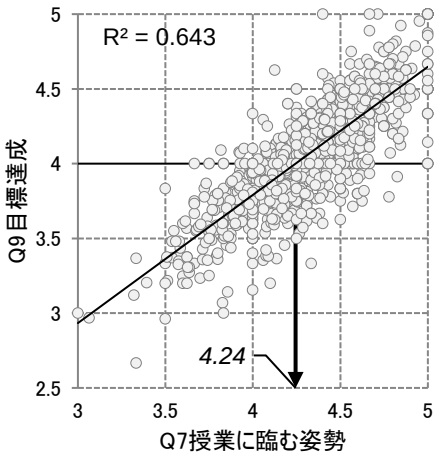


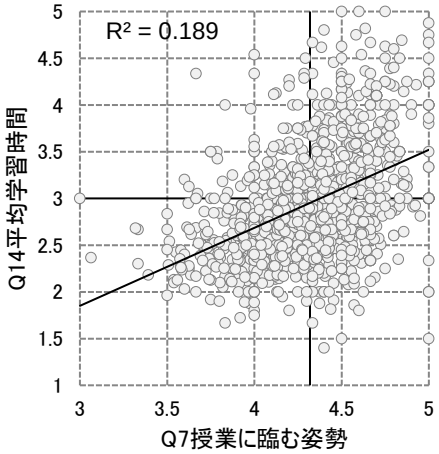
Q7　私は、この授業の目標を達成すべく、真剣に授業に臨んだ

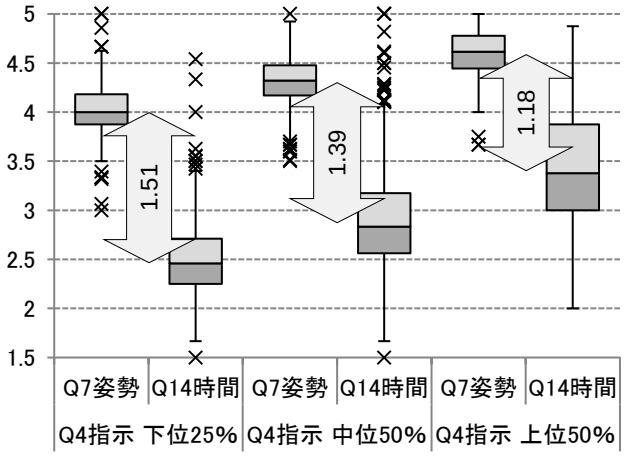


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.565	.029
Q2教員努力	.586	.054
Q3教員シラバス対応	.538	.037
Q4課題、準備・復習指示	.523	−.010
Q5教員質問相談対応	.561	.025
Q6教材・教具効果	.605	.096
Q7授業に臨む姿勢		
Q8質問・調査努力	.692	.300
Q9目標達成	.698	.241
Q10有用性	.637	.080
Q11興味関心の向上	.615	.013
Q12総合評価	.642	.080
Q13出席率	.316	.158
Q14平均学習時間	.281	.023

高い相関で互いに結ばれる Q8 質問・調査努力、Q9 目標達成とともに昨年同時期を上回る結果を得たのは前述の通りです。右の散布図では、第二象限が「ほぼ空白」になっており、学生は「真剣に授業に臨んだ」との自己認識なしに「授業の到達目標を達成できた」とは考えないようです。真剣な取り組みなしに目標が達成できるような授業はないという解釈もできそうです。しかしながら、縦軸を Q14 平均学習時間と置き換えてみると、右下図に示す通り、相関係数は著しく小さくなり、実際に Q7 授業に臨む姿勢で中央値（4.32）に達するケースでも Q14 では「31～60 分」に相当する 3.0 ポイントに届くのは半数程度の授業であることがわかります。目標を達成すべく真剣に授業に臨んだとの学生による自己認識と、授業外学習における具体的な行動とは、依然として必ずしも一致していません。

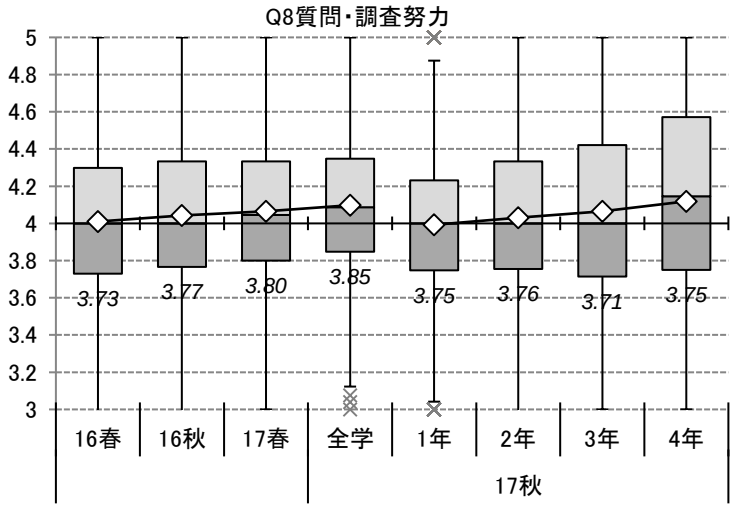






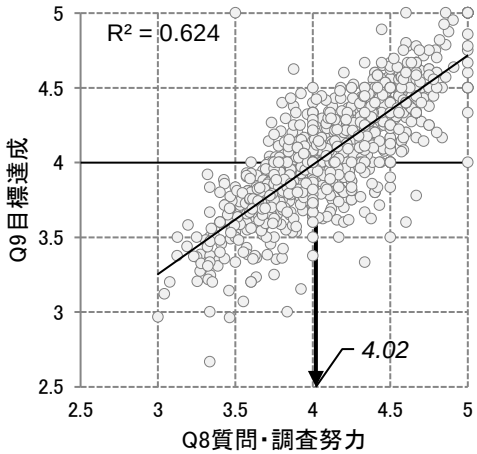
左図の通り、Q4 課題、準備・復習指示が高いほど Q7 と Q14 のギャップは縮小する傾向にあります。Q7 授業に臨む姿勢と Q14 平均学習時間の相関を高める鍵は、改善が遅れている Q4 にあると考えられます。

Q8　私は、わからないことを質問したり調べたりして、その解消に努めた

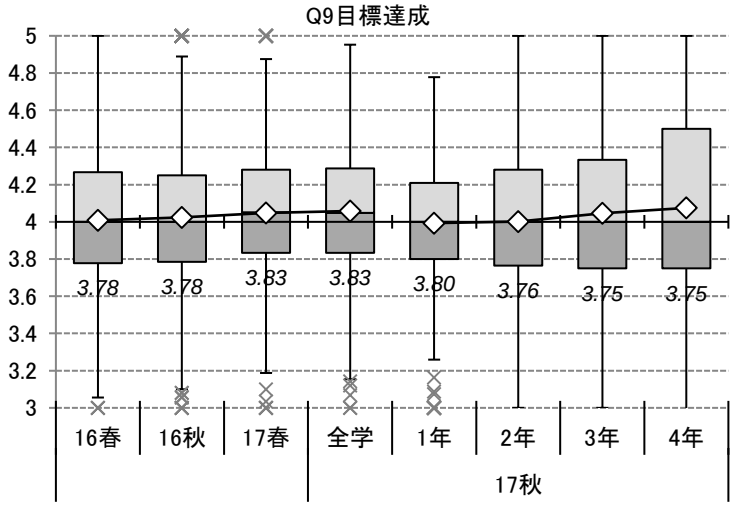


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.467	−.032
Q2教員努力	.480	−.015
Q3教員シラバス対応	.440	−.036
Q4課題、準備・復習指示	.522	.155
Q5教員質問相談対応	.495	.061
Q6教材・教具効果	.501	−.027
Q7授業に臨む姿勢	.692	.300
Q8質問・調査努力		
Q9目標達成	.695	.310
Q10有用性	.573	.053
Q11興味関心の向上	.587	.102
Q12総合評価	.550	−.036
Q13出席率	.228	−.004
Q14平均学習時間	.359	.161

全学の平均は連続して伸びてきており、学年が上がるごとに上昇していく様子も明らかです。偏相関は Q9 目標達成、Q14 平均学習時間との間で高く、わからないことの所在に気づかせ、解消の方法を学ばせることが、到達目標の達成をより確かなものにし、授業外の学習をより充実させることに繋がると考えられます。前回の報告でお伝えした通り、不明の所在に気付かせるには、先生方からの問い掛けが欠かせません。また、学生自身に問いを立てさせる活動を採り入れてみるのも好適です。



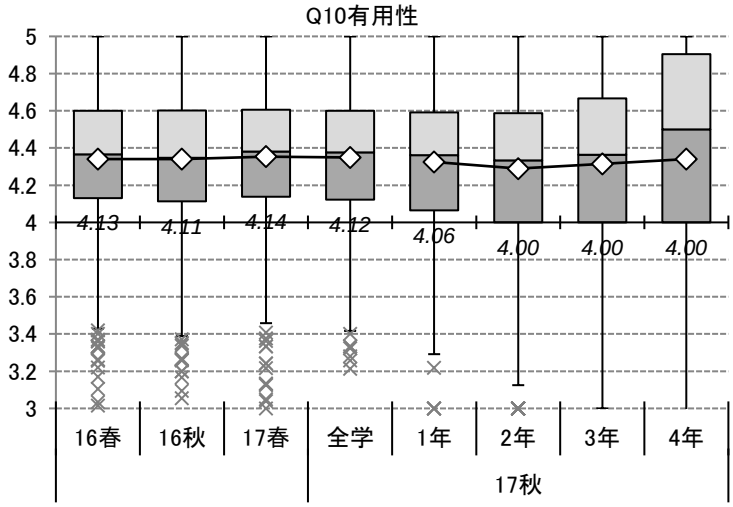
Q9　私は、この授業の到達目標を達成できた（できる）



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.507	.040
Q2教員努力	.508	−.021
Q3教員シラバス対応	.478	.033
Q4課題、準備・復習指示	.479	.000
Q5教員質問相談対応	.488	−.032
Q6教材・教具効果	.539	.020
Q7授業に臨む姿勢	.698	.241
Q8質問・調査努力	.695	.310
Q9目標達成		
Q10有用性	.625	.101
Q11興味関心の向上	.653	.201
Q12総合評価	.609	.003
Q13出席率	.261	.056
Q14平均学習時間	.296	.037

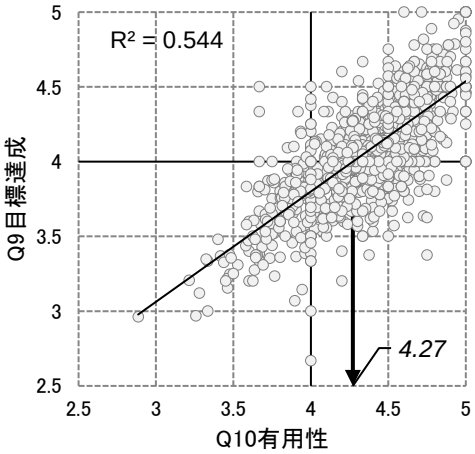
着実に改善が進んでいます。解くべき課題を与えて Q7 授業に臨む姿勢と Q8 質問・調査努力を刺激すればこの項目の改善が図られ、その先に Q11 興味関心の向上が来るのは既述の通りです。

Q10 私がこの授業で得たものは、今後の学習活動や人生に活きる

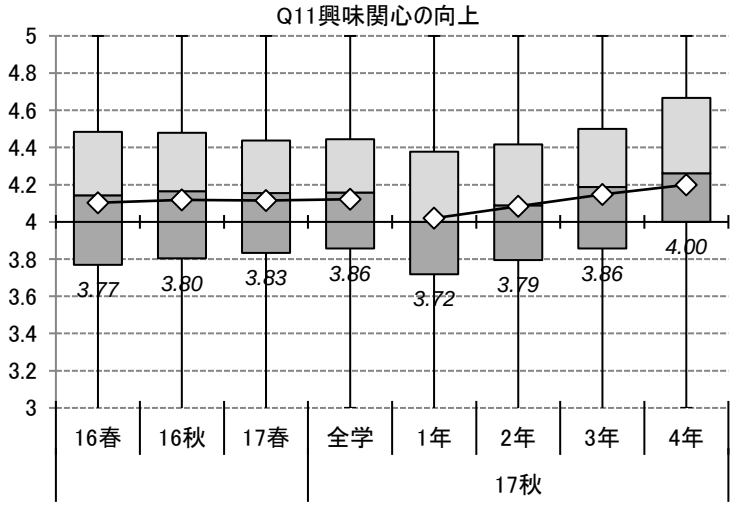


	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.579	.030
Q2教員努力	.598	.024
Q3教員シラバス対応	.545	.033
Q4課題、準備・復習指示	.519	.028
Q5教員質問相談対応	.569	.019
Q6教材・教具効果	.620	.049
Q7授業に臨む姿勢	.637	.080
Q8質問・調査努力	.573	.053
Q9目標達成	.625	.101
Q10有用性		
Q11興味関心の向上	.703	.180
Q12総合評価	.753	.312
Q13出席率	.238	.025
Q14平均学習時間	.249	.019

引き続き高い評価を得ています。Q12 総合評価との間の相関はかなり高く、Q11 興味関心との間でも密接な関連が見られる点も前回までと同様です。学習したことの有用性に気付くことが新たな興味や関心を抱くきっかけになり、「履修して良かった」との感想に繋がる図式が想定できます。右図に見る通り、Q9 目標達成で 4.0 ポイント以上であれば、Q10 有用性もほぼ例外なく同水準に達しますが、第 4 象限（Q10 有用性≧4.0、Q9 目標達成＜4.0）に位置する授業は 282（全体の 25.7%）を数えます。有用性を認識しながら到達目標が達成できていないケースです。有用性に気づいても、到達目標が達成できないのでは、実際の活用場面で課題解決の有用な道具になりません。履修を終えた後も学び続けてくれるとは限らず、第二象限を脱して第一象限に向かいたいところです。

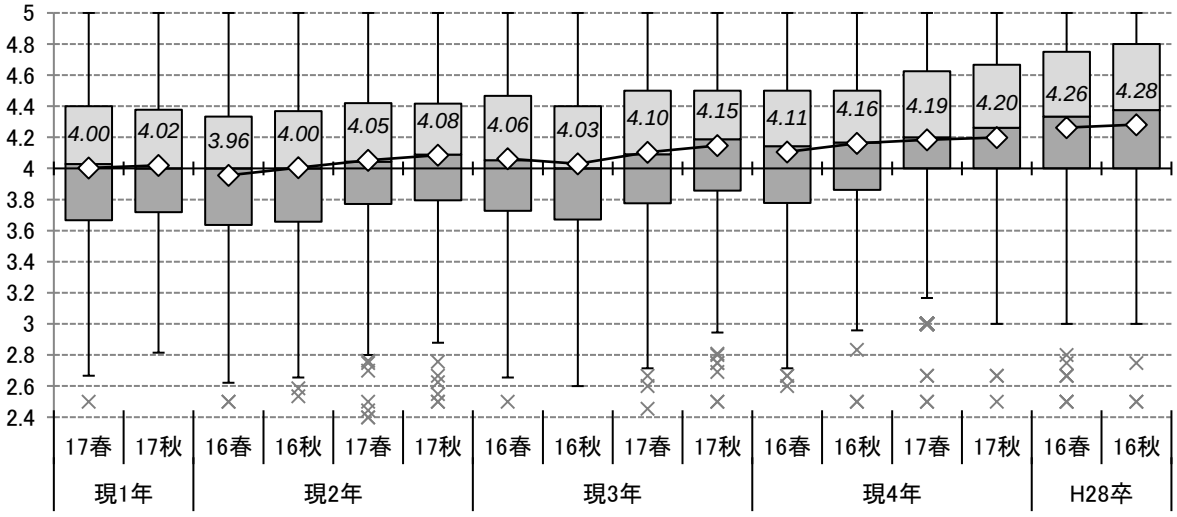


Q11 私は、この授業を受けてこの科目や関連分野が好きになった



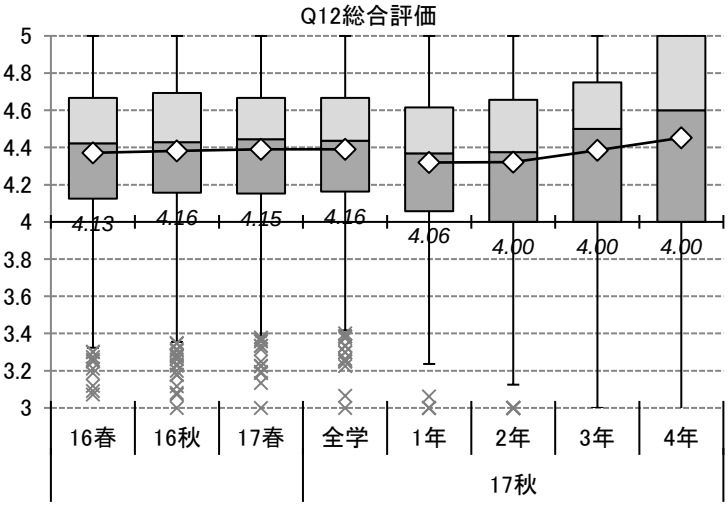
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.528	−.004
Q2教員努力	.548	−.005
Q3教員シラバス対応	.487	−.020
Q4課題、準備・復習指示	.465	−.042
Q5教員質問相談対応	.522	−.012
Q6教材・教具効果	.597	.081
Q7授業に臨む姿勢	.615	.013
Q8質問・調査努力	.587	.102
Q9目標達成	.653	.201
Q10有用性	.703	.180
Q11興味関心の向上		
Q12総合評価	.767	.411
Q13出席率	.199	−.056
Q14平均学習時間	.261	.037

4.0 ポイント未満の授業は全体の 34.2%を占めており、引き続き改善が必要と思われますが、学期が進むごとに平均は上昇する傾向にあり、指導の成果は着実に積み上げられています。特に学部前半の指導改善は大きな成果を結びつつあるとみてよさそうです。現 2 年生の評価は、一つ上の学年の 1 年前（現 3 年の 16 秋）を有意に上回っていますし、1 年生も有意性こそ確認できないものの、現 2 年の 1 年前を平均で上回り、箱の下端も高い位置にあります。この勢いを失わないよう、これまでの改善成果の上に立って、更なる改善を図っていきたいところです。



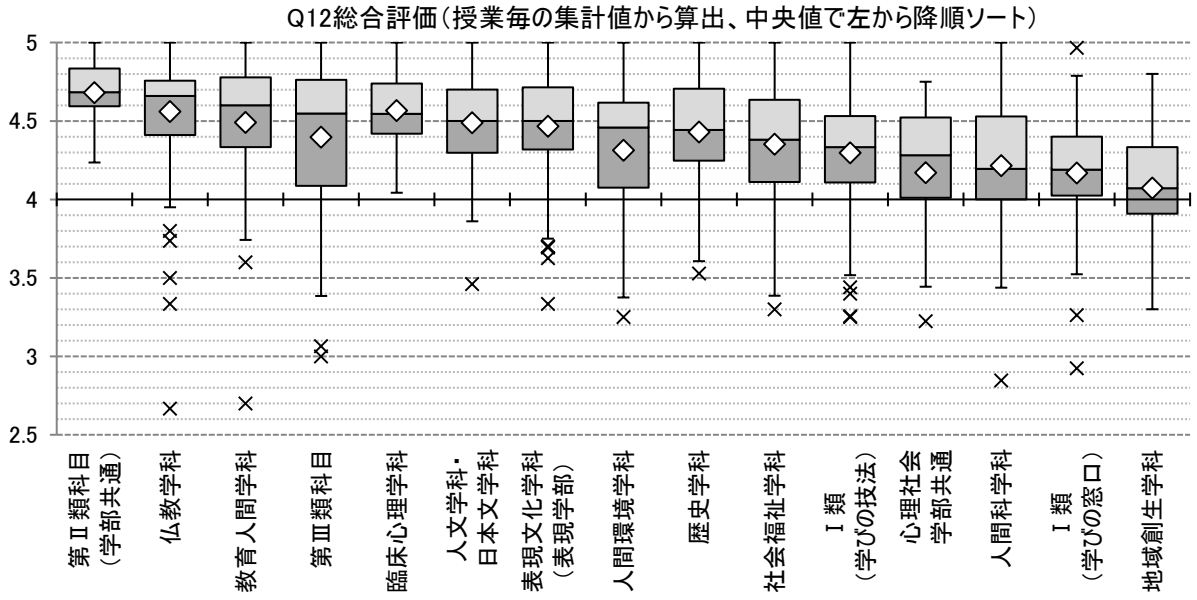
この項目を目的変数とする重回帰分析（説明変数は Q12 総合評価を除く他の 12 項目）で求めた偏回帰係数は、Q10 有用性（0.510）、Q8 質問・調査努力（0.175）、Q9 目標達成（0.151）、Q6 教材・教具効果（0.145）なっており、その他の項目では偏回帰係数に有意性が見られません。突出して高い値となった Q10 有用性をいかに高められるかが、更なる改善に向けたカギと考えられます。授業で得たものを自分との関りのある場面で実際に使ってみなければ、その有用性の認識は困難です。授業内外の課題にそのような要素をどれだけ盛り込めるかによって、有用性をどこまで認識させられるか、科目や関連分野に対する興味を深められるかが決まると言えそうです。

Q12 全体として、この授業を受けてよかった



	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.619	.053
Q2教員努力	.648	.089
Q3教員シラバス対応	.570	.000
Q4課題、準備・復習指示	.526	−.016
Q5教員質問相談対応	.611	.065
Q6教材・教具効果	.669	.117
Q7授業に臨む姿勢	.642	.080
Q8質問・調査努力	.550	−.036
Q9目標達成	.609	.003
Q10有用性	.753	.312
Q11興味関心の向上	.767	.411
Q12総合評価		
Q13出席率	.251	.071
Q14平均学習時間	.233	.004

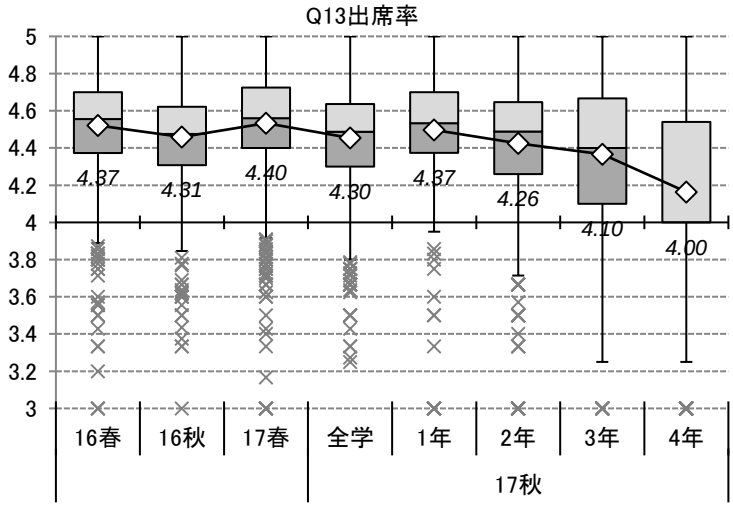
Q12 総合満足を大きく左右するのは、Q11 興味関心の向上、Q10 有用性であることが、偏相関の高さから推定されます。学年が上がるごとに評価が高まる傾向（1 年 4.22、2 年 4.22、3 年 4.31、4 年 4.51）は以前と変わりません。科目区分よる違いを探ってみると、上位の仏教学部の 4.56 と下位の地域創生学部の 4.07 との間には平均値で 0.5 ポイントに近い差があります。高学年ほど高評価という傾向の中、2 年生までしかいない地域創生学部には不利な条件ですが、下表に示す通り、2 年生秋学期に 4.0 ポイントを下回るのは、当学部を除くと人間科学科だけです。学年・学期ごとの全学平均を大きく下回っている集計区分（学年×科目区分）では、Q10、Q11 の改善を図ることで、「授業を受けてよかった」との回答を増やしていきたいところです。



履修者の学年による満足度の科目区分×学年・学期比較（回答から直接算出）

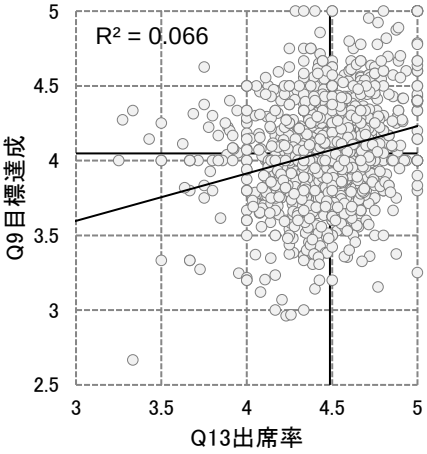
Q12総合満足（科目区分×履修生学年）	1年		2年		3年		4年	
	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期	春学期	秋学期
第Ⅱ類科目（学部共通）	4.75	4.45	4.76	4.71	4.45	4.61	4.55	4.78
仏教学科	4.46	4.40	4.53	4.54	4.53	4.56	4.57	4.55
教育人間学科	4.49	4.59	4.42	4.23	4.26	4.34	4.65	4.60
第Ⅲ類科目	4.28	4.68	4.02	4.13	4.02	4.00	4.32	4.23
臨床心理学科	4.72	4.71	4.42	4.40	4.52	4.49	4.55	4.66
人文学科・日本文学科	4.38	4.39	4.31	4.30	4.32	4.31	4.45	4.61
表現文化学科（表現学部）	4.51	4.33	4.23	4.36	4.31	4.43	4.47	4.62
人間環境学科	4.41	4.39	4.34	4.37	4.16	4.00	4.52	4.26
歴史学科	4.27	4.17	4.07	4.21	4.18	4.28	4.37	4.48
社会福祉学科	4.17	4.01	4.25	4.27	4.20	4.14	4.43	4.60
Ⅰ類（学びの技法）	4.30	4.23	4.19	4.16	4.37	4.40	4.50	4.50
心理社会学部共通	4.33	3.99	4.22	4.17	3.89	4.45	4.00	4.31
人間科学科	3.93	4.03	3.99	3.91	4.01	4.14	4.13	4.06
Ⅰ類（学びの窓口）	4.16	4.14	4.10	4.13	4.14	4.21	4.23	4.25
地域創生学科	4.27	4.12	3.92	3.97				
合計	4.30	4.22	4.19	4.22	4.26	4.31	4.44	4.51

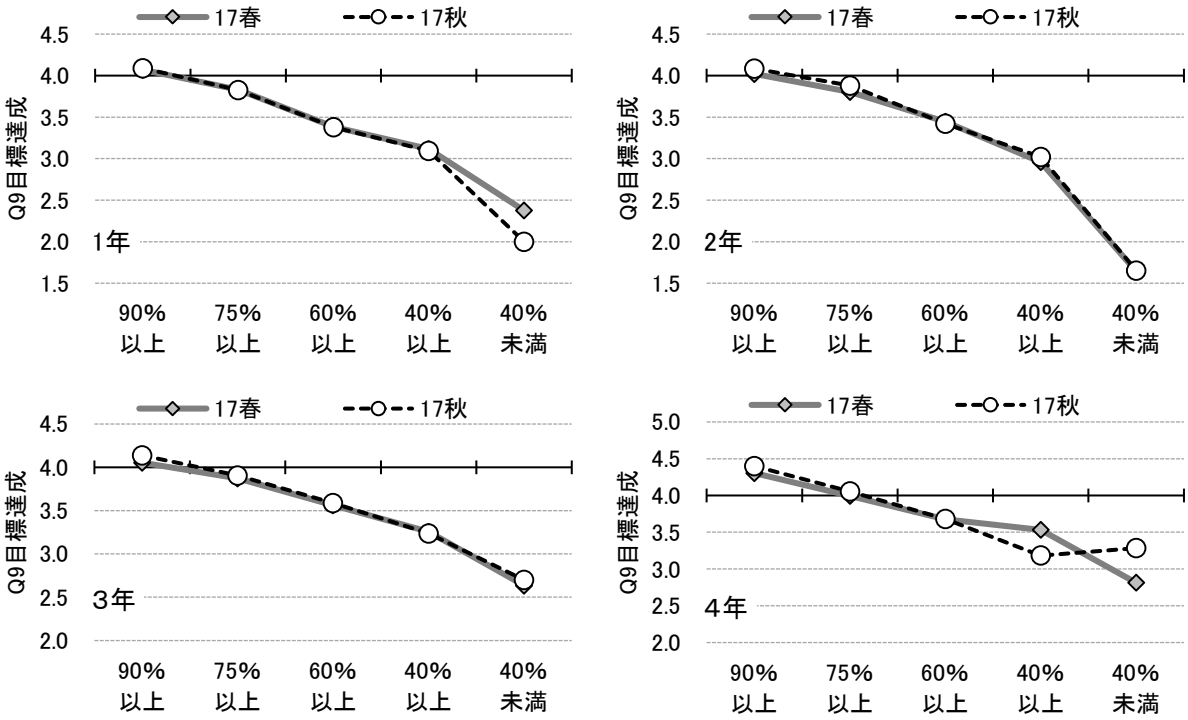
Q13 あなたのこの授業の出席率はどれくらいでしたか



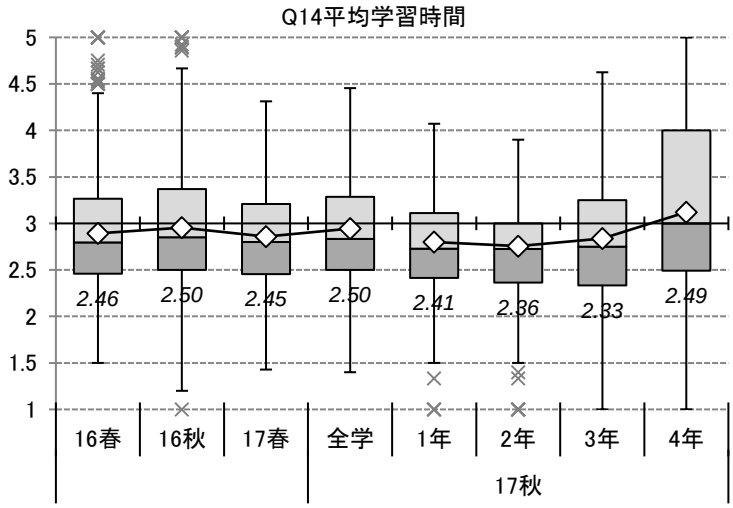
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.189	−.007
Q2教員努力	.202	.012
Q3教員シラバス対応	.187	.021
Q4課題、準備・復習指示	.152	−.036
Q5教員質問相談対応	.192	.019
Q6教材・教具効果	.175	−.058
Q7授業に臨む姿勢	.316	.158
Q8質問・調査努力	.228	−.004
Q9目標達成	.261	.056
Q10有用性	.238	.025
Q11興味関心の向上	.199	−.056
Q12総合評価	.251	.071
Q13出席率		
Q14平均学習時間	.092	.002

出席率は前回を下回り、昨年同時期とほぼ同じ水準です。Q7 授業に臨む姿勢との間には比較的強い偏相関が見られますが、その他の項目との相関ははっきりしません。Q9 目標達成との散布図（右図：座表面はそれぞれの中央値で分割）で第二象限に位置する授業は、出席率が相対的に低くても学習目標が達成できるということになります。これらの授業では、授業の到達目標が、教室での対話的活動（先生との問答、学生同士の討論など）を達成の要件としないタイプ［＝教科書を読めばわかる、覚えれば良いなど］になっていないか振り返ってみる必要があるかもしれません。



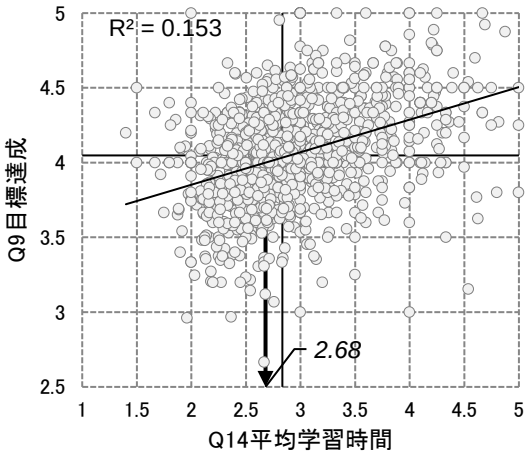


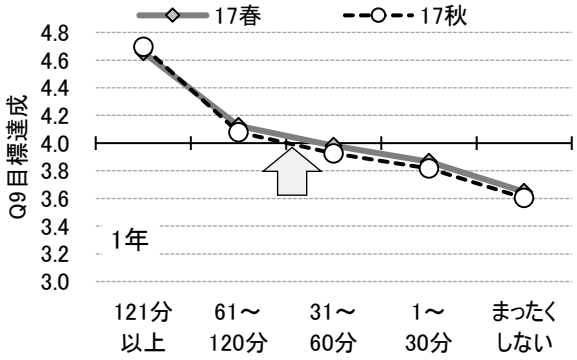
Q14 この授業のための課題、準備・復習に何時間取り組みましたか

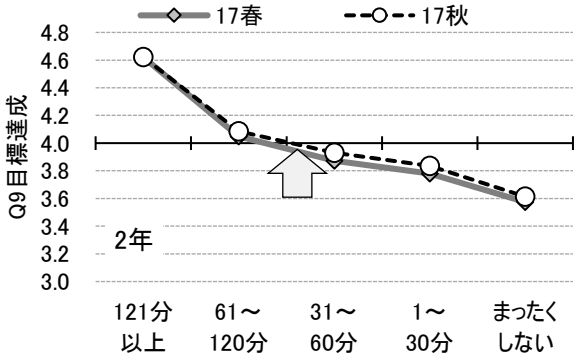


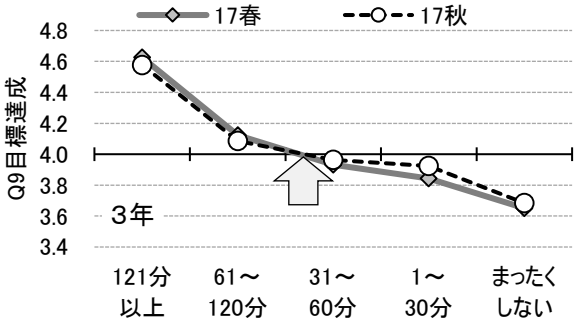
	単相関	偏相関
Q1教員目標明示	.190	.010
Q2教員努力	.173	−.037
Q3教員シラバス対応	.161	−.039
Q4課題、準備・復習指示	.287	.155
Q5教員質問相談対応	.181	−.040
Q6教材・教具効果	.187	−.034
Q7授業に臨む姿勢	.281	.023
Q8質問・調査努力	.359	.161
Q9目標達成	.296	.037
Q10有用性	.249	.019
Q11興味関心の向上	.261	.037
Q12総合評価	.233	.004
Q13出席率	.092	.002
Q14平均学習時間		

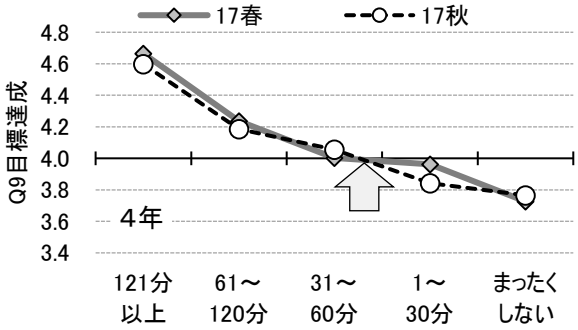
前回までの結果とほぼ同じ水準です。箱の下端は、授業1回あたり30分程度（「31分以上60分未満」と「1分以上30分未満」の境界）に相当する2.5前後で推移しています。右の散布図（それぞれの中央値で座表面を分割）で第二象限に位置する場合、目標をもう少し高く設定してもよさそうです。下図では、Q9目標達成4.0ポイントと交差する位置が、学年が上がるごとに右に移動（3.49→3.45→3.30→2.74）しており、目標達成に必要な学習時間が減る傾向が見られます。











		Q14平均学習時間の回答分布		Q9目標達成の平均				
科目区分	学年	30分以下（累計）	61分以上（累計）	121分以上	61～120分	31～60分	1～30分	まったくしない
Ⅰ類（学びの技法）	1	39%	26%	4.59	4.04	3.88	3.80	3.62
	2	47%	21%	4.74	4.01	3.87	3.78	3.73
	3	48%	19%	4.63	4.10	3.99	4.04	3.93
	4	45%	28%	5.00	4.17	4.22	3.81	3.82
Ⅰ類（学びの窓口）	1	59%	17%	4.79	4.09	3.93	3.78	3.59
	2	53%	22%	4.72	4.18	3.89	3.73	3.50
	3	57%	20%	4.67	4.10	3.80	3.85	3.74
	4	36%	39%	4.79	4.07	3.97	3.68	3.31
教育人間学科	1	45%	28%	4.58	4.22	4.01	4.11	3.88
	2	46%	25%	4.58	4.30	4.05	3.98	3.71
	3	46%	28%	4.52	4.18	3.84	4.03	3.74
	4	28%	44%	4.45	4.48	4.03	3.79	4.14
社会福祉学科	1	42%	27%	4.53	4.05	3.76	3.70	3.42
	2	40%	26%	4.65	4.24	3.87	3.74	3.69
	3	32%	31%	4.06	3.92	3.71	3.81	3.43
	4	22%	56%	4.53	3.97	4.00	3.17	4.14
心理社会学部共通	1	53%	20%	4.56	3.80	3.76	3.61	3.49
	2	59%	17%	4.78	3.93	3.86	3.90	3.56
	3	74%	10%	4.83	4.17	3.83	3.78	3.63
	4	42%	19%	5.00	4.25	3.90	4.00	3.25
人間科学科	1	43%	25%	4.74	3.96	3.80	3.64	3.58
	2	57%	19%	4.23	3.93	3.75	3.73	3.35
	3	52%	26%	4.37	4.06	3.91	3.74	3.39
	4	45%	27%	4.00	3.40	3.67	3.92	4.00
人間環境学科	1	42%	24%	4.80	4.29	3.98	4.28	4.13
	2	44%	26%	4.93	4.10	4.10	3.90	3.42
	3	48%	23%	4.48	3.70	3.79	3.69	3.41
	4	27%	52%	4.65	4.13	3.47	3.67	3.91
人文学科・日本文学科	1	53%	22%	4.67	4.22	4.00	3.89	3.60
	2	43%	29%	4.48	4.04	3.95	3.88	3.73
	3	45%	25%	4.66	4.10	3.94	3.83	3.77
	4	27%	47%	4.81	4.39	4.04	3.85	3.47
第Ⅱ類科目（学部共通）	1	20%	35%	4.80	4.50	4.44	4.50	4.00
	2	31%	37%	4.78	4.50	4.09	4.60	4.83
	3	11%	44%	4.71	4.00	4.63	5.00	5.00
	4	44%	44%	5.00	5.00	3.00	4.00	5.00
第Ⅲ類科目	1	19%	69%	4.79	4.50	3.50	4.41	2.00
	2	48%	23%	4.50	4.14	3.97	3.78	3.53
	3	50%	26%	4.47	3.91	3.93	3.70	3.41
	4	43%	26%	4.89	4.14	3.96	3.88	3.69
地域創生学科	1	50%	26%	4.80	4.06	3.96	3.92	3.64
	2	50%	20%	4.67	4.08	3.87	3.74	3.56
表現文化学科（表現学部）	1	45%	24%	4.84	4.12	4.05	3.91	3.84
	2	47%	25%	4.46	4.18	4.03	3.91	3.76
	3	41%	35%	4.64	4.13	3.91	4.10	3.86
	4	22%	51%	4.53	4.22	4.22	3.96	4.13
仏教学科	1	45%	30%	4.79	3.98	4.02	3.68	3.92
	2	45%	30%	4.94	4.32	4.20	4.36	3.72
	3	52%	20%	4.80	4.24	4.31	4.18	3.95
	4	34%	35%	4.73	4.22	4.09	4.01	3.76
臨床心理学科	1	36%	24%	4.83	3.94	4.36	4.26	4.44
	2	33%	40%	4.36	3.95	3.85	3.95	3.73
	3	45%	30%	4.50	4.14	4.04	3.76	4.05
	4	18%	46%	4.43	4.04	3.97	4.25	3.86
歴史学科	1	46%	23%	4.68	4.18	3.94	3.76	3.18
	2	44%	23%	4.57	3.99	3.93	3.69	3.48
	3	45%	27%	4.64	4.19	3.99	3.84	3.50
	4	28%	45%	4.35	4.08	4.09	3.82	3.52
総計		45%	26%	4.63	4.09	3.94	3.85	3.63

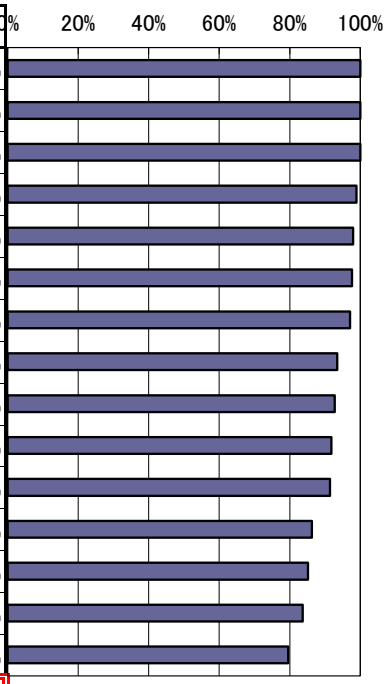
参考資料１

実施率／回収率

参考資料1-1. アンケート実施率（回収率）科目区分別

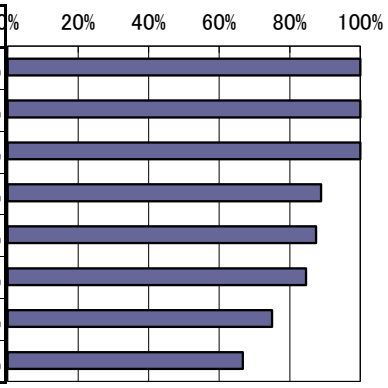
■学部1096科目

科目区分	授業数	実施数	実施率
12 心理社会学部共通	13	13	100.0%
13 教育人間学科	57	57	100.0%
19 第Ⅱ類科目（学部共通）	8	8	100.0%
14 人文学科・日本文学科	89	88	98.9%
15 Ⅰ類（学びの窓口）	50	49	98.0%
11 人間科学科	43	42	97.7%
03 Ⅰ類（学びの技法）	240	233	97.1%
15 歴史学科	107	100	93.5%
07 仏教学科	138	128	92.8%
20 第Ⅲ類科目	61	56	91.8%
09 人間環境学科	35	32	91.4%
17 表現文化学科（表現学部）	168	145	86.3%
08 社会福祉学科	81	69	85.2%
18 地域創生学科	49	41	83.7%
10 臨床心理学科	44	35	79.5%
計	1183	1096	92.6%



■大学院73科目

科目区分	授業数	実施数	実施率
05 院社会福祉学専攻（修士）	4	4	100.0%
07 院比較文化専攻（修士・博士）	3	3	100.0%
08 院宗教学専攻（修士・博士）	6	6	100.0%
04 院臨床心理学専攻（修士）	18	16	88.9%
01 院仏教学専攻（修士・博士）	32	28	87.5%
02 院史学専攻（修士・博士）	13	11	84.6%
06 院人間科学専攻（修士）	4	3	75.0%
03 院国文学専攻（修士・博士）	3	2	66.7%
計	83	73	88.0%



参考資料1-2. アンケート実施率（学部） 2005年度春学期～2017年度秋学期

年度	学期	回収率	回収数	開講講座数
2005年度	春学期	86.0%	773	899
2005年度	秋学期	83.9%	705	840
2006年度	春学期	70.2%	817	1163
2006年度	秋学期	83.3%	749	899
2007年度	春学期	92.1%	793	861
2007年度	秋学期	89.1%	725	814
2008年度	春学期	92.7%	789	851
2008年度	秋学期	87.3%	714	818
2009年度	春学期	90.9%	777	855
2009年度	秋学期	87.4%	706	808
2010年度	春学期	91.9%	839	913
2010年度	秋学期	92.9%	793	854
2011年度	春学期	92.8%	852	918
2011年度	秋学期	91.8%	812	885
2012年度	春学期	89.6%	844	942
2012年度	秋学期	81.9%	799	975
2013年度	春学期	94.4%	913	967
2013年度	秋学期	92.9%	848	913
2014年度	春学期	96.3%	1009	1048
2014年度	秋学期	94.3%	985	1045
2015年度	春学期	96.3%	1049	1089
2015年度	秋学期	92.4%	1040	1125
2016年度	春学期	96.3%	1123	1166
2016年度	秋学期	95.3%	1072	1125
2017年度	春学期	96.3%	1172	1217

2017年度	**秋学期**	**92.6%**	**1096**	**1183**

参考資料２

自由記述回答

頻出キーワード分析

自由記述回答　頻出キーワード分析について

概要

本参考資料は授業アンケートの最後に「授業運営のために意見があれば具体的にお書きください。」として用意された自由記述欄に記載のあった回答につきデータ化をした上で、頻出する単語を調査・分析し、同種の意見の集約・集計を行ったものです。

目的

頻出する意見を明らかにすることにより大学全体の傾向をつかみ、全学として優先的に取り組むべき課題を明らかにすることを目的としています。

この為、キーワード※1 として出現頻度の上位 10 ワードを特に重要なものとして集計対象とし、11 位以下のキーワードについては参考として表示しています。また、前回比較グラフは出現率※2 による前回と前々回（＝前年同期）データに加え、今回の全学平均を表示しています。改善項目と悪化項目を明らかにすることで、とったアクションの効果を確認し、全学平均との比較により重点改善課題を抽出することにお役立て下さい。

課題の抽出

前回同様、集計グラフ内の肯定的内容のキーワードの頭に●を付しました。同じキーワードでも●付き（肯定的）と●なし（否定的）が存在する場合があります。

頻出キーワードの【全体】集計では「楽しい・面白い」、「分かりやすい」が引き続きの上位 1 位、2 位をキープしました。キーワード「楽しい・面白い」は従来同様「興味深い内容だった」「好きな授業」「充実した授業」などの意見も含んでいます。それぞれの言葉の使い方が学生により異なり言葉の定義として一貫しないことから、項目としては分けず積極的な肯定的意見としてまとめることが適当であるとの判断によります。

3 位は「分かりづらい」ですが、出現率は前回春学期の 4 割以下、昨年同時期（2016 年度秋学期）と比較しても約 5 割にまで出現率が減少し、大きく改善しました。

4 位「●プリント・資料・教材」、5 位「●丁寧」は共に肯定的コメントであり、6 位以降に否定的キーワードが出現率 12～6 の低値で現れており、全体的に改善が進んだと言えます。

特に前出の 3 位「分かりづらい」の他、上位の常連であった「はやい」（今回 7 位）、「聞きにくい」（今回 9 位）、「プリント・資料・教材」（今回 12 位）も前回春学期、及び昨年同時期と比べて、出現率において 5 割～4 割に減少し、顕著な改善を見ました。その他の否定的な項目でも出現率が増加した項目はほとんどなく、こうした全体としての改善が進んだことで「分かりづらい」の大きな改善をもたらしたと言えそうです。

肯定的なコメントでは、全体の 5 位となった「●プリント・資料・教材」の出現率が昨年同時期は集計対象外であったのに対し、前回（春学期）に 11.2、今回はさらに 14.5 に上昇したことは同じキーワードでの否定的回答の減少と合せて注目に値します。

少数意見

出現頻度の少ないキーワードは個々の授業の特殊性や、教員あるいは学生個別の理由によるものが少なくありません。従って、こうしたキーワードについてはむしろ、それぞれの教員においてその全文を自ら確認し、授業改善のために利用されることが重要であり、本資料における集計・分析の対象からは除外しています。

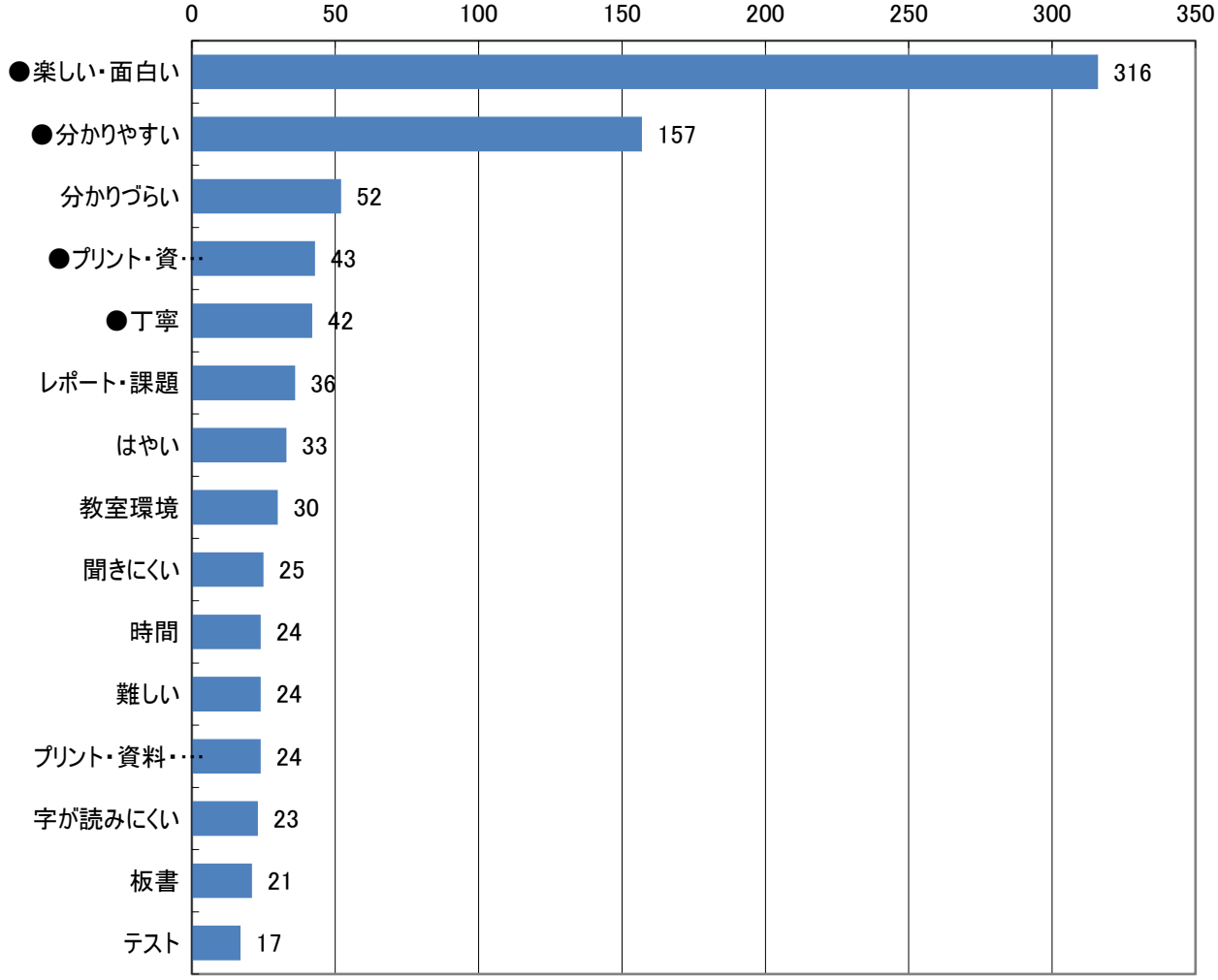
※1 キーワードと集計内容について

同一のキーワードを含む回答でも肯定的な意見と否定的な意見は項目として分けて集計をしています。
例えば「板書」というキーワードの内容は「板書が分かりにくい／板書をしてほしい･･･」（29 頁下段表参照）など否定的なものあるいは要望等を集計しており、肯定的なものは含んでいません。
また、キーワードはあくまでその内容を代表する言葉を当てはめたものです。例えば「聞きにくい」は、回答中に「聞きにくい」という単語がなくても「声が小さい」という単語があれば、「聞こえない」と同義と判断しこのキーワードとしてカウントしています。

※2 出現率について

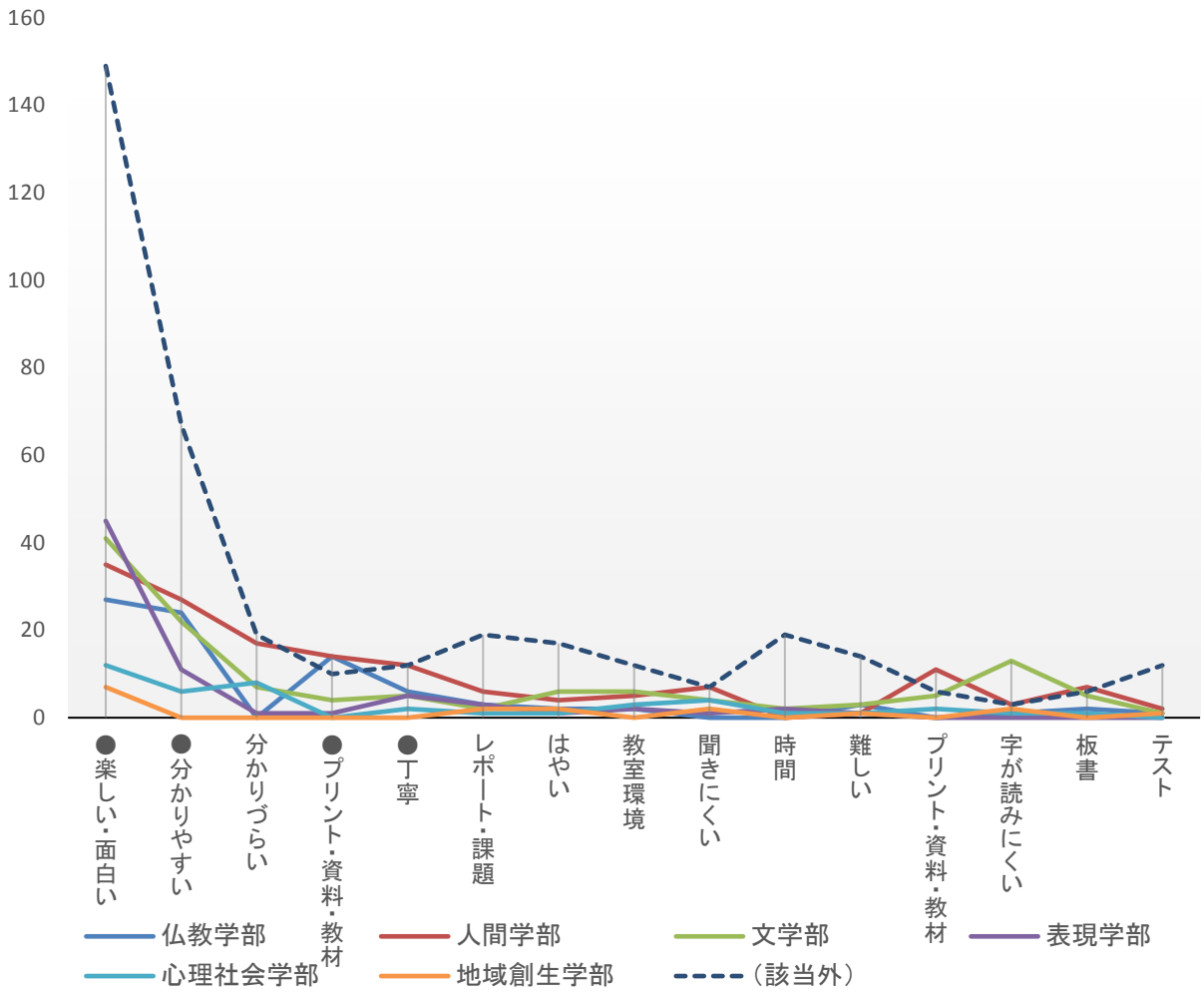
33 ページ下段の説明を参照ください

自由記述回答　頻出キーワード
【全学】

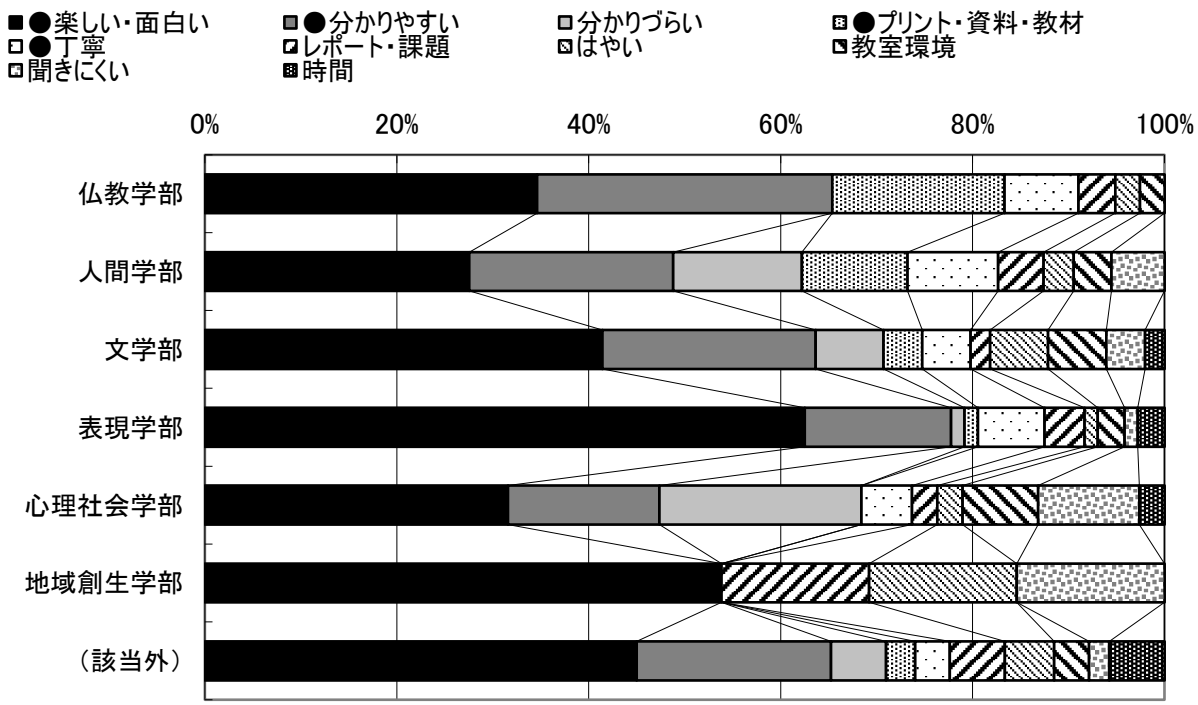


キーワード	主な内容	出現数
●楽しい・面白い	楽しかった／楽しい授業だった／面白かった	316
●分かりやすい	授業の仕方、説明、教え方、資料等が分かりやすかった 理解しやすかった	157
分かりづらい	分かりづらかった／説明・資料等が分かりにくい	52
●プリント・資料・教材	「わかりやすい」「充実していた」等に限定。	43
●丁寧	丁寧な授業／丁寧な添削／丁寧なコメント／丁寧な質問対応	42
レポート・課題	レポート、課題の出し方を改善してほしい／評価のしかたについて	36
はやい	進行がはやくついていけない／パワーポイント、スライドの画面替えが早すぎる	33
教室環境	教室が狭い／教室が暑い（または寒い）／空調が良くない	30
聞きにくい	声が小さく聞こえない／聞き取りづらい／マイクを使ってほしい／マイクの音が聞こえない、聞きづらい	25
時間	時間配分を改善してほしい／時間を守ってほしい	24
難しい	難しすぎる	24
プリント・資料・教材	プリントが分かりにくい／プリントを配布してほしい／プリントの使い方について	24
字が読みにくい	黒板・パワーポイント・スライド等の字が小さい・読みにくい／板書の字が汚く読めない／誤字脱字が多い	23
板書	板書が分かりにくい／板書してほしい／見づらい	21
テスト	テストの実施方法、範囲／テスト時間が短い	17
＜以下番外＞		
うるさい	周囲がうるさい／私語が多い	16
●映像・映画	映像・ビデオ等で分かりやすく良かった、面白かった。	14

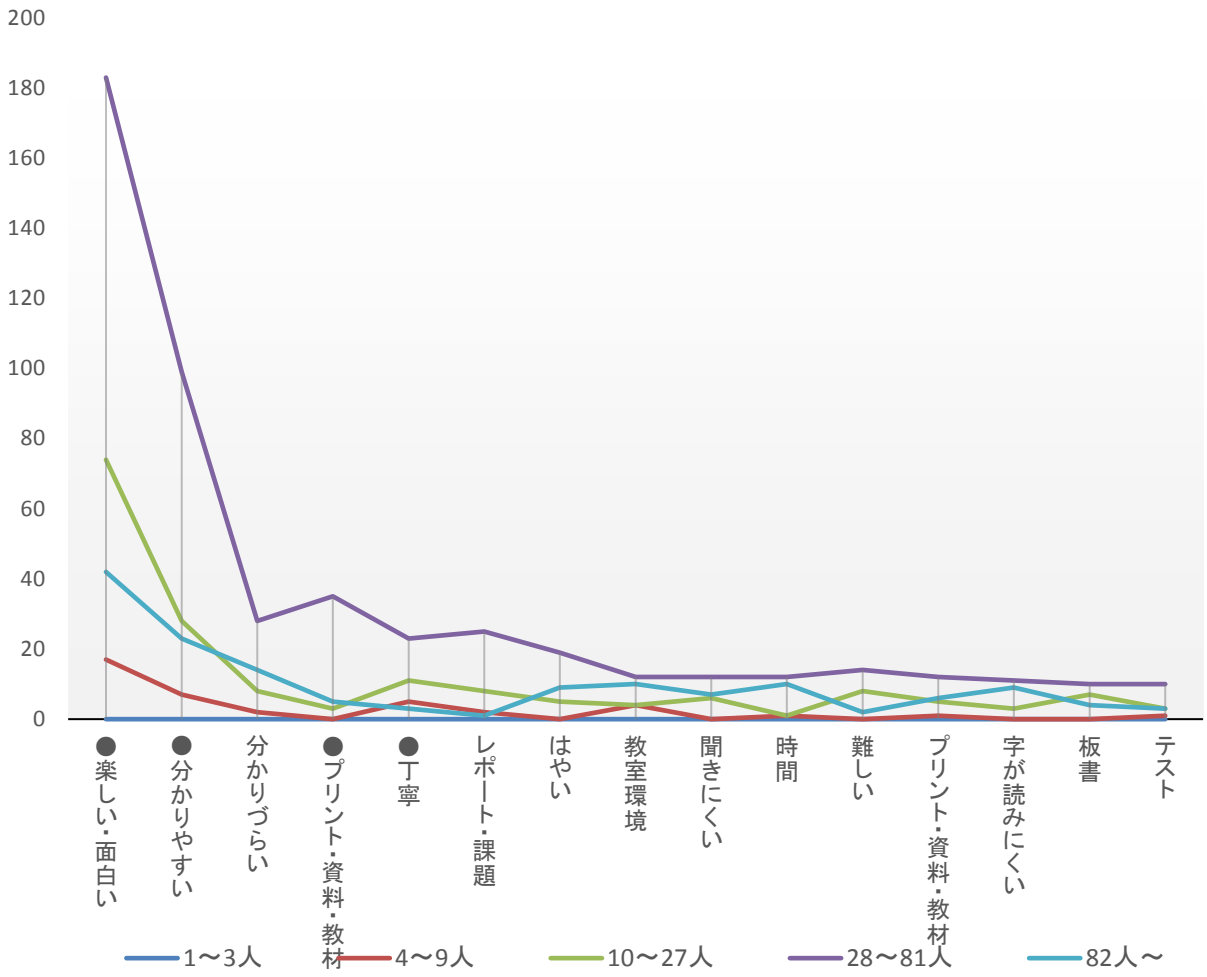
自由記述回答　頻出キーワード
【学部別】



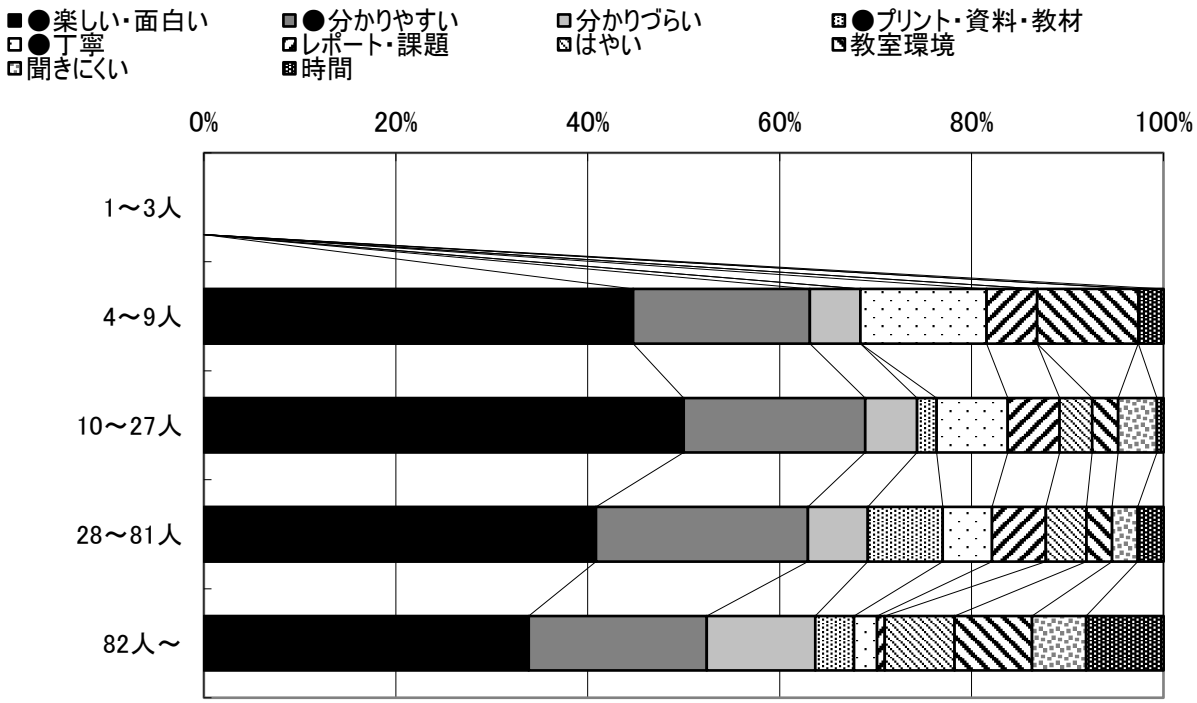
上位10項目の学部別割合



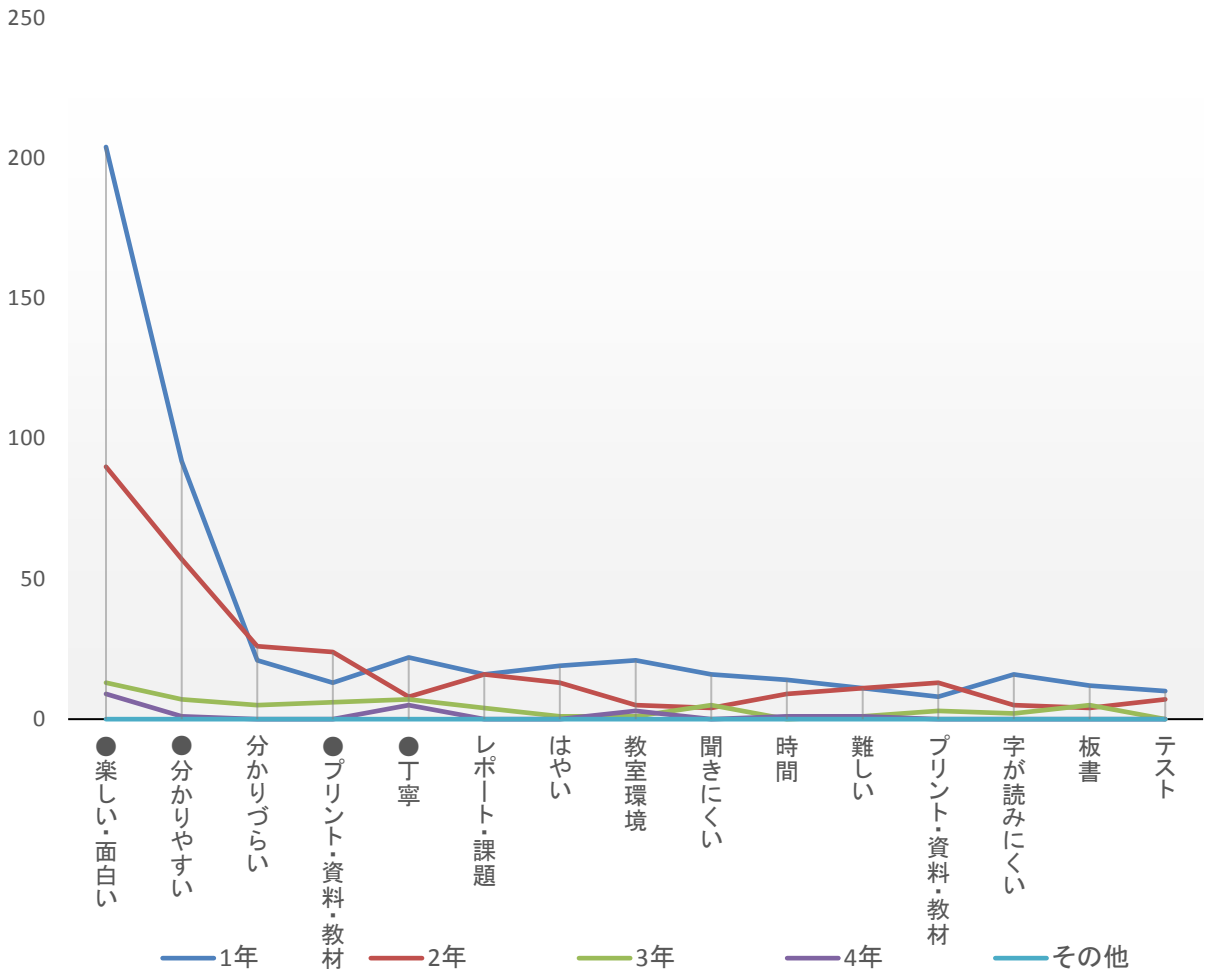
自由記述回答　頻出キーワード
【回答人数帯別】



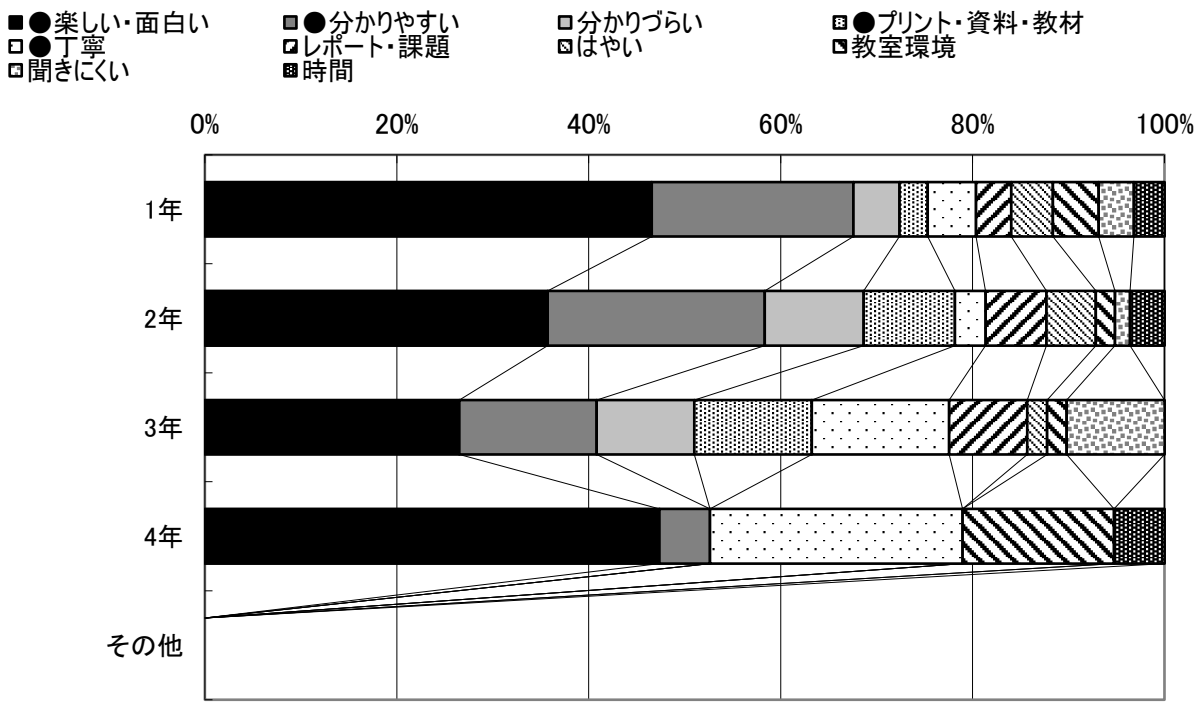
上位10項目の回答人数帯別割合



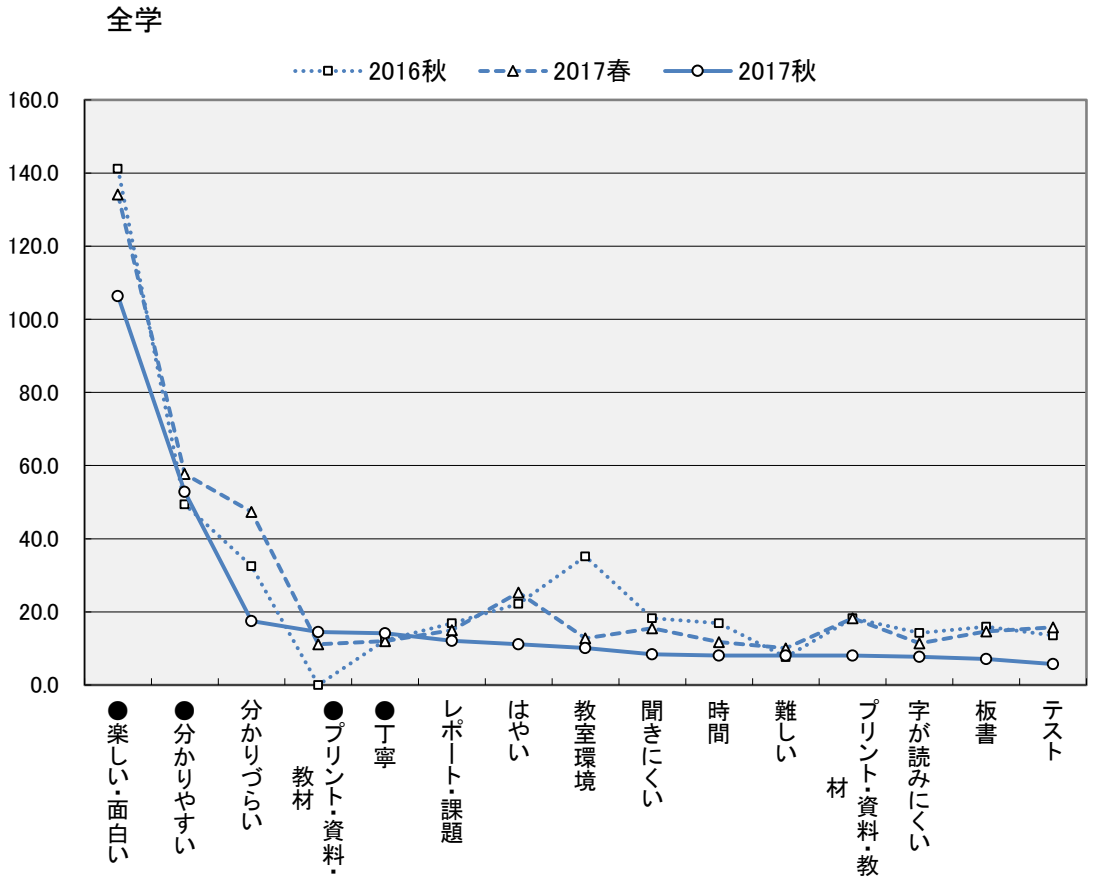
自由記述回答　頻出キーワード
【学年別】



上位10項目の学年別割合



自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 全学

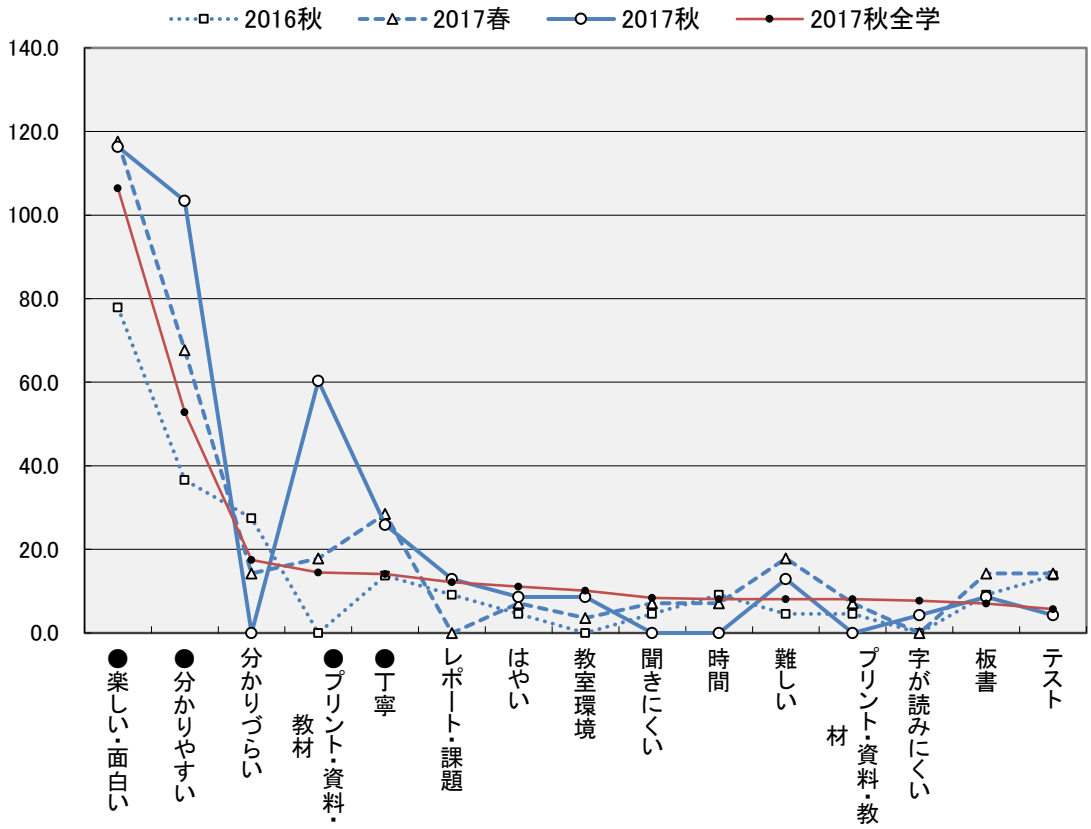


「出現率」について

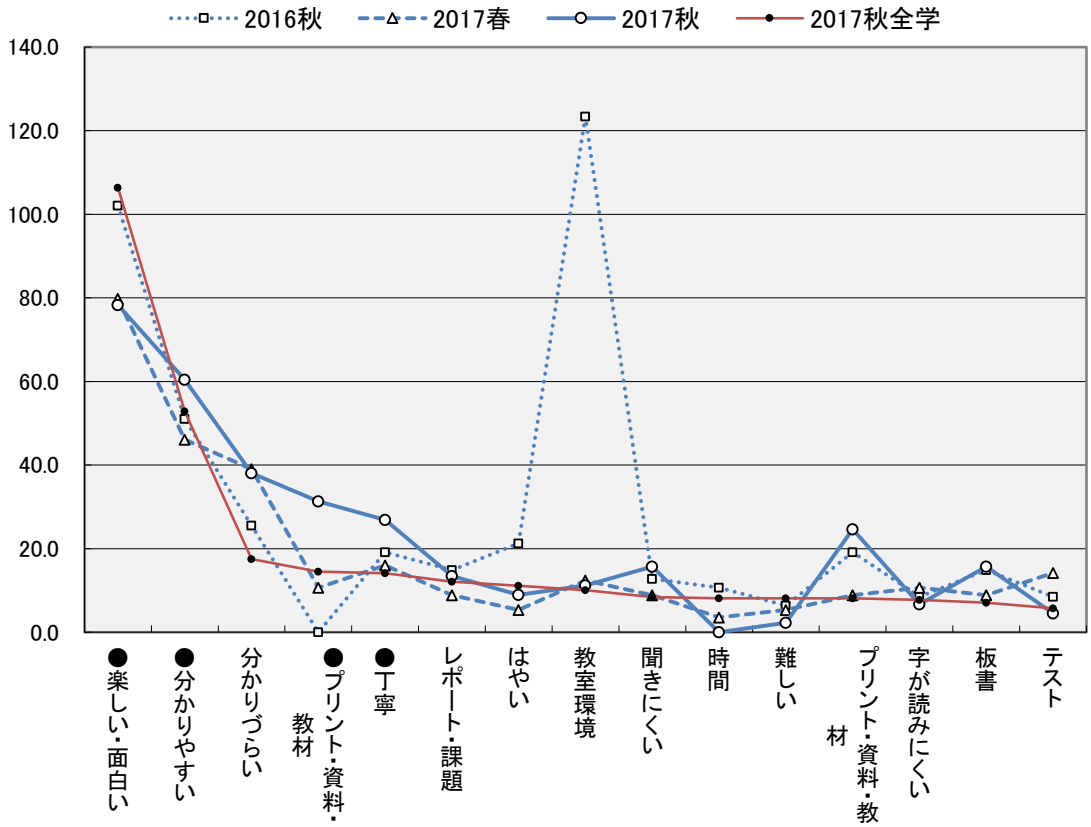
- 自由記述回答の頻出キーワードに関する前回比較では、出現回数ではなく出現率により比較を行っています。
  総回答数が春学期と秋学期では異なり、単純な出現数では比較ができないためです。
  出現率は下記の式で計算されます。
  出現率＝出現数／回答者数×10^4
  （回答者数：授業アンケートの回答者数で自由記述回答の記載者数ではありません。）
- 次ページ以降の学部別、回答数区分別、学年別における出現率算出の為の回答者数は、それぞれのカテゴリーにおける回答者数を使用しています。
- 前回との比較において；
  肯定的回答では今回の出現率が上がっている項目は改善、下がっている項目は悪化です。
  否定的回答で今回の出現率が下がっている項目は改善、上がっている項目は悪化です。

自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 学部別

《仏教学部》

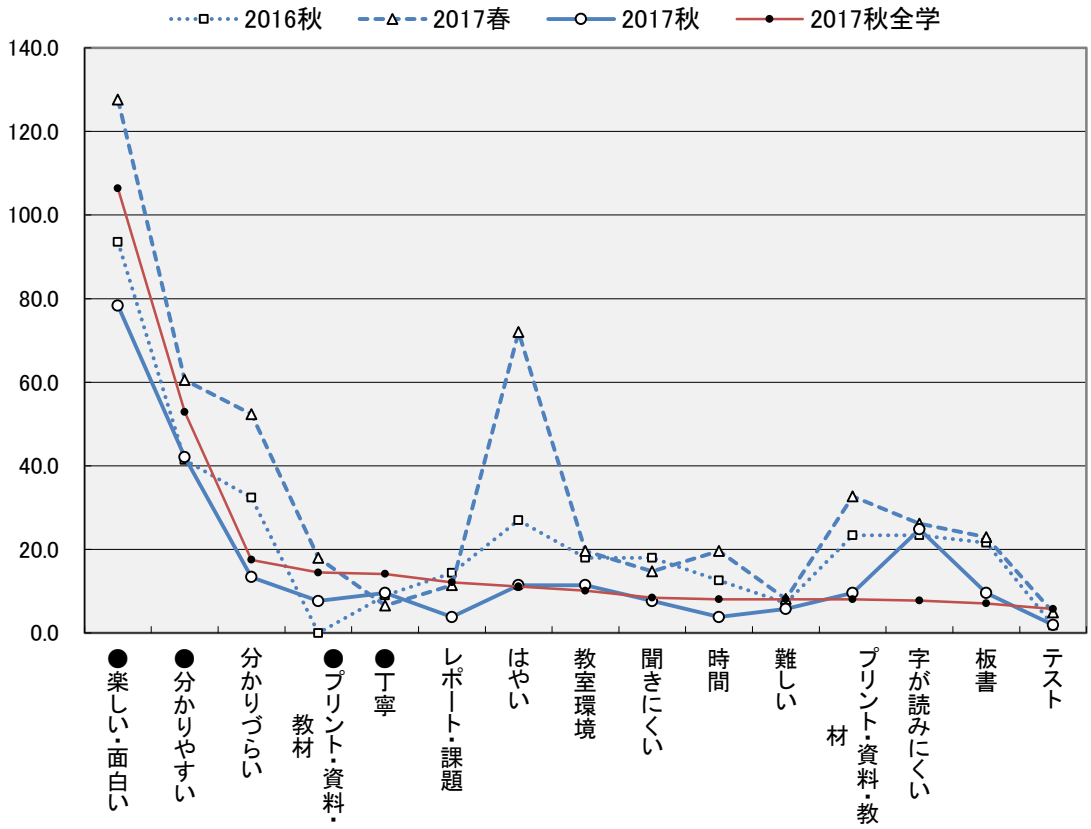


《人間学部》

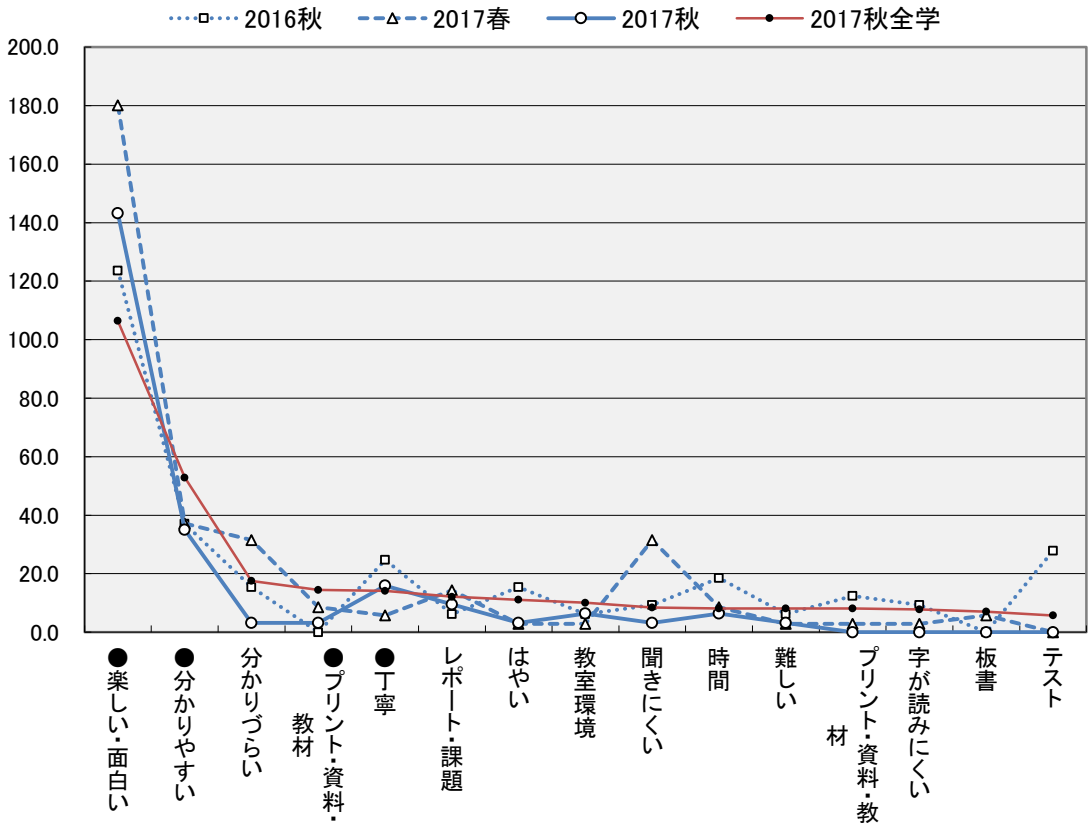


自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 学部別

《文学部》

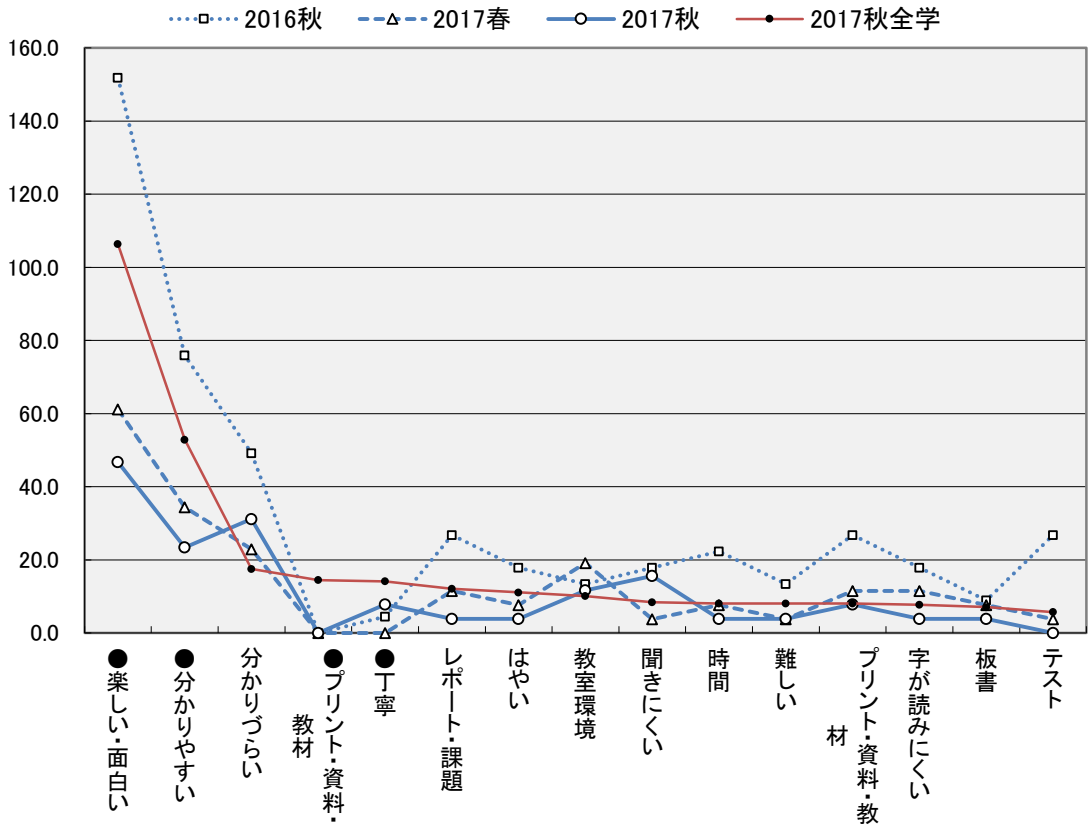


《表現学部》

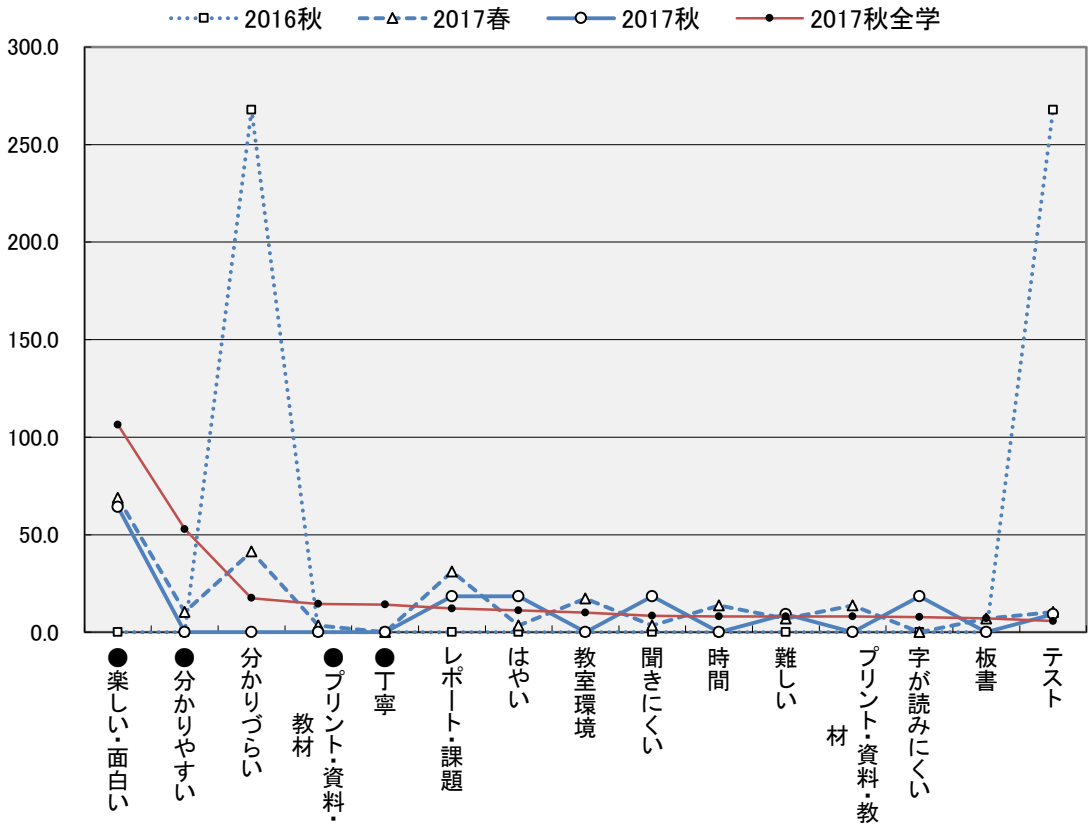


自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 学部別

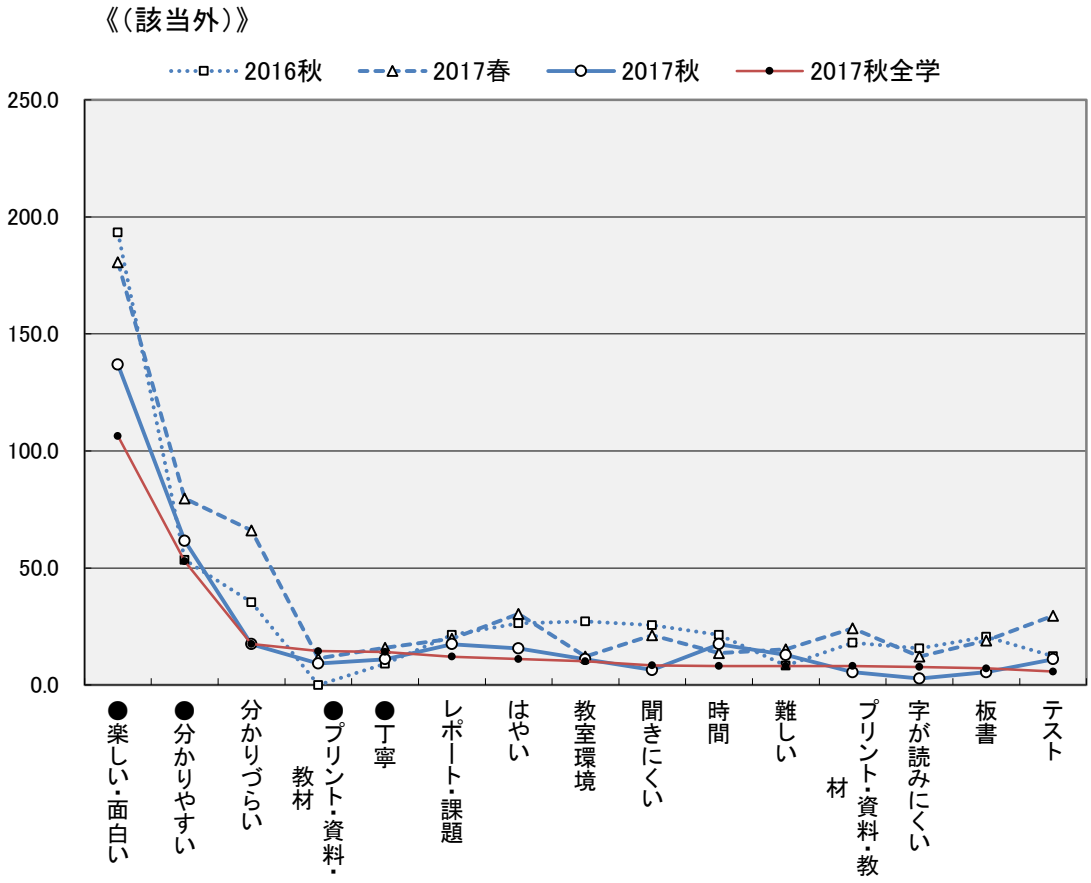
《心理社会学部》



《地域創生学部》

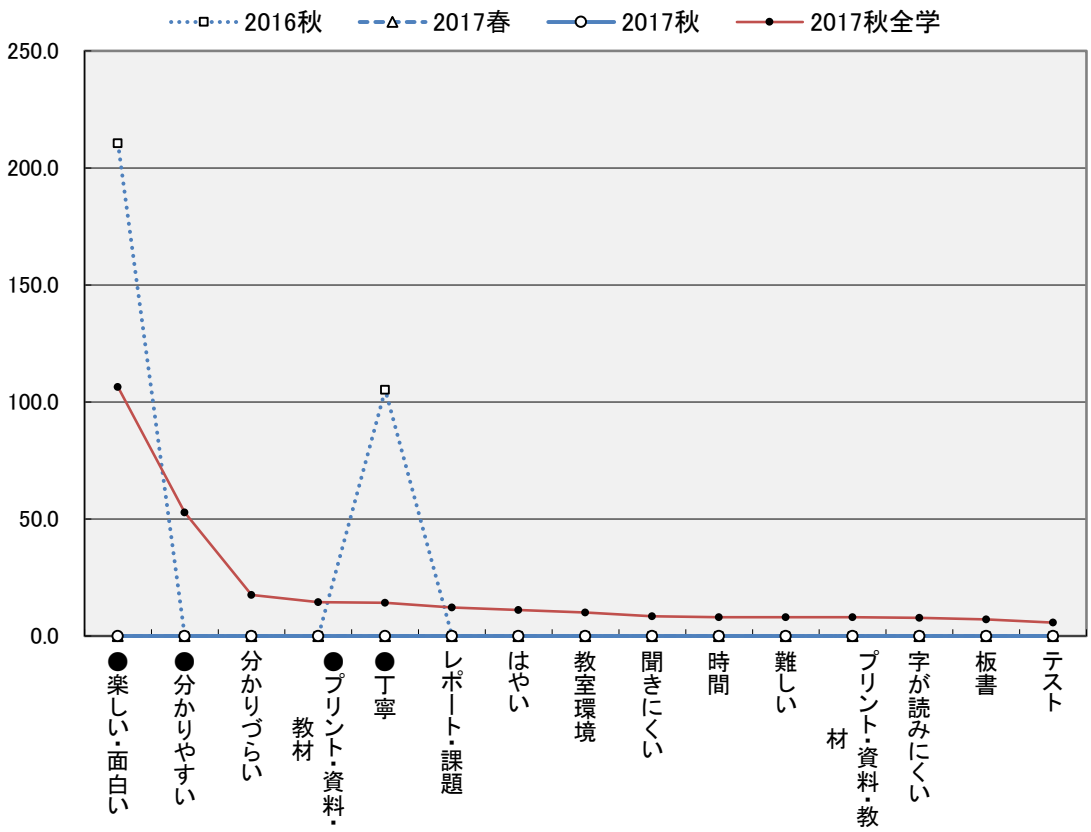


自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 学部別

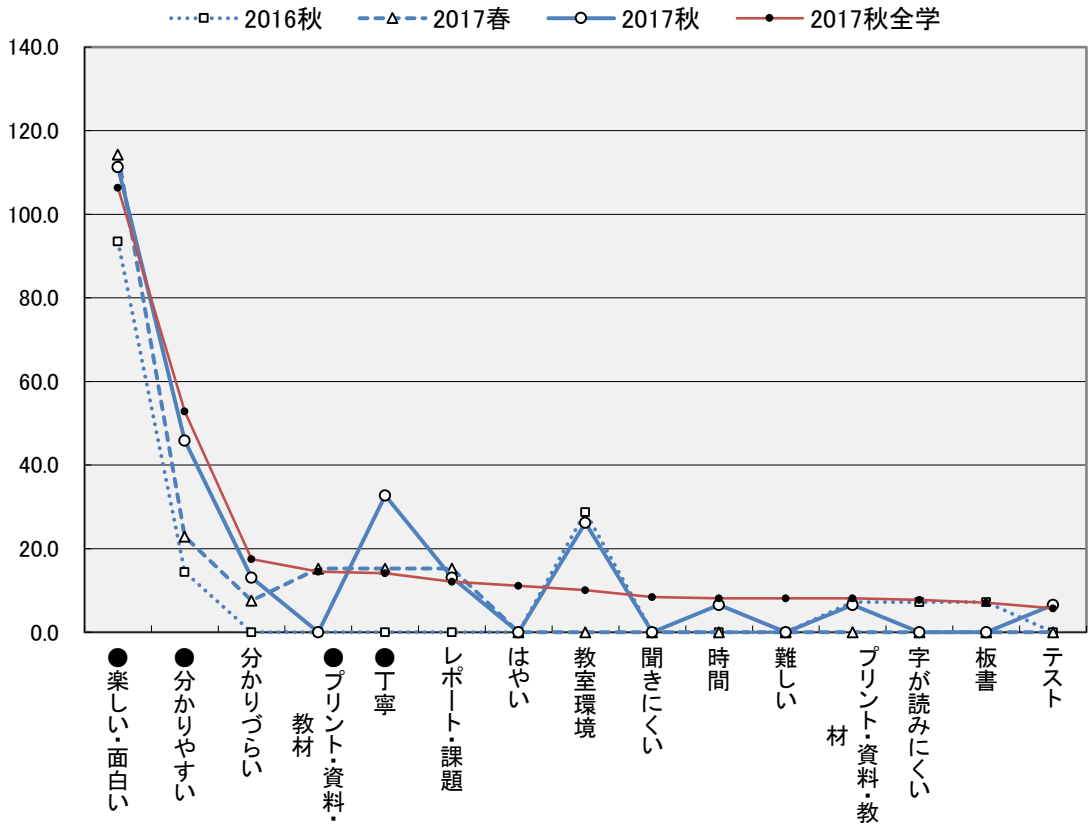


自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《1～3人》

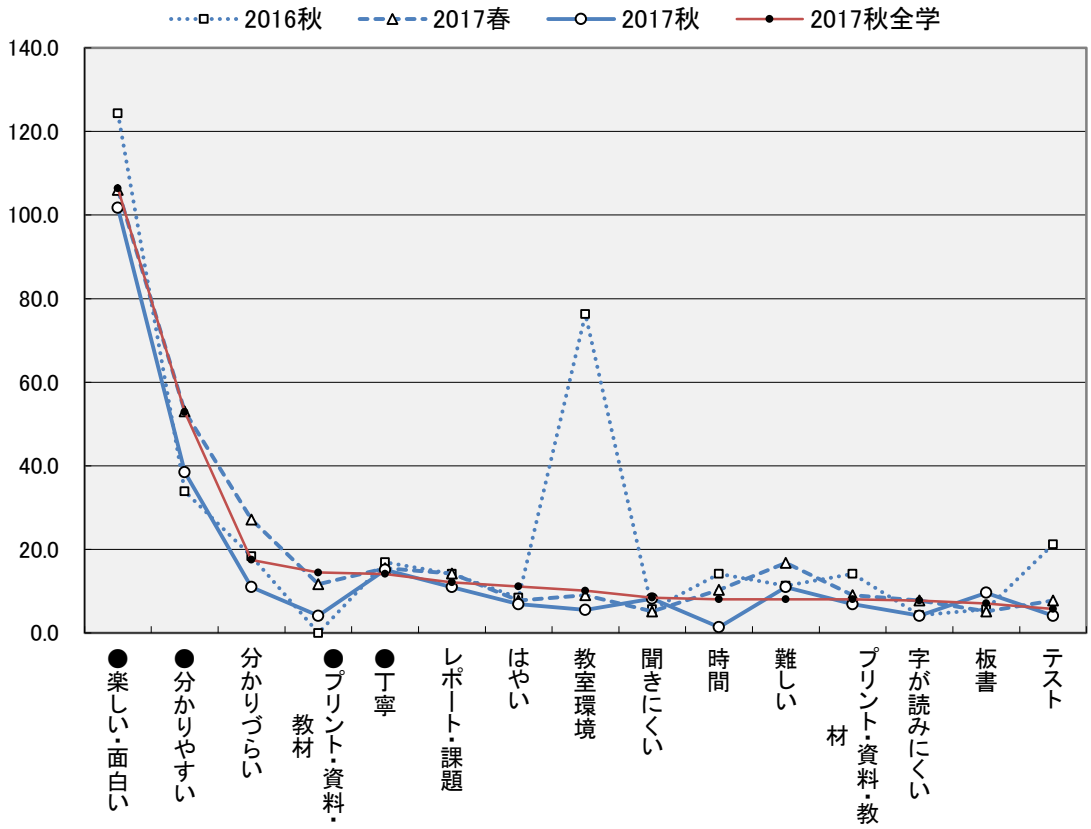


《4～9人》

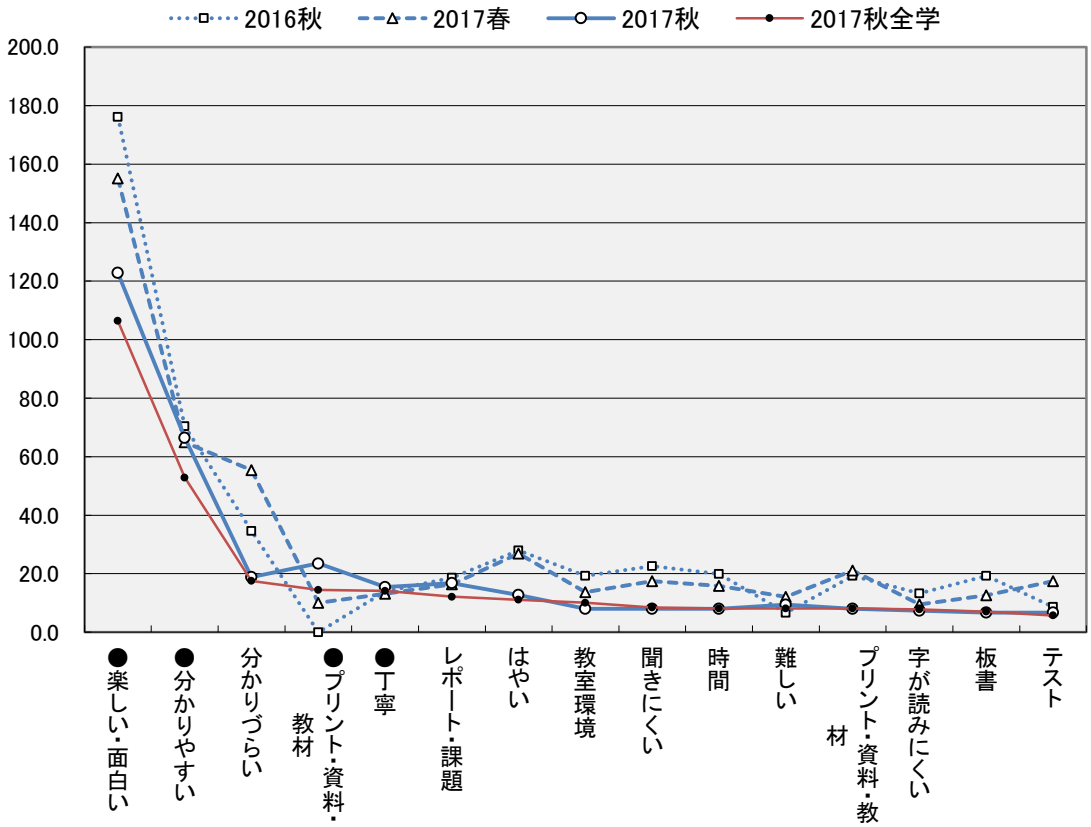


自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《10～27人》

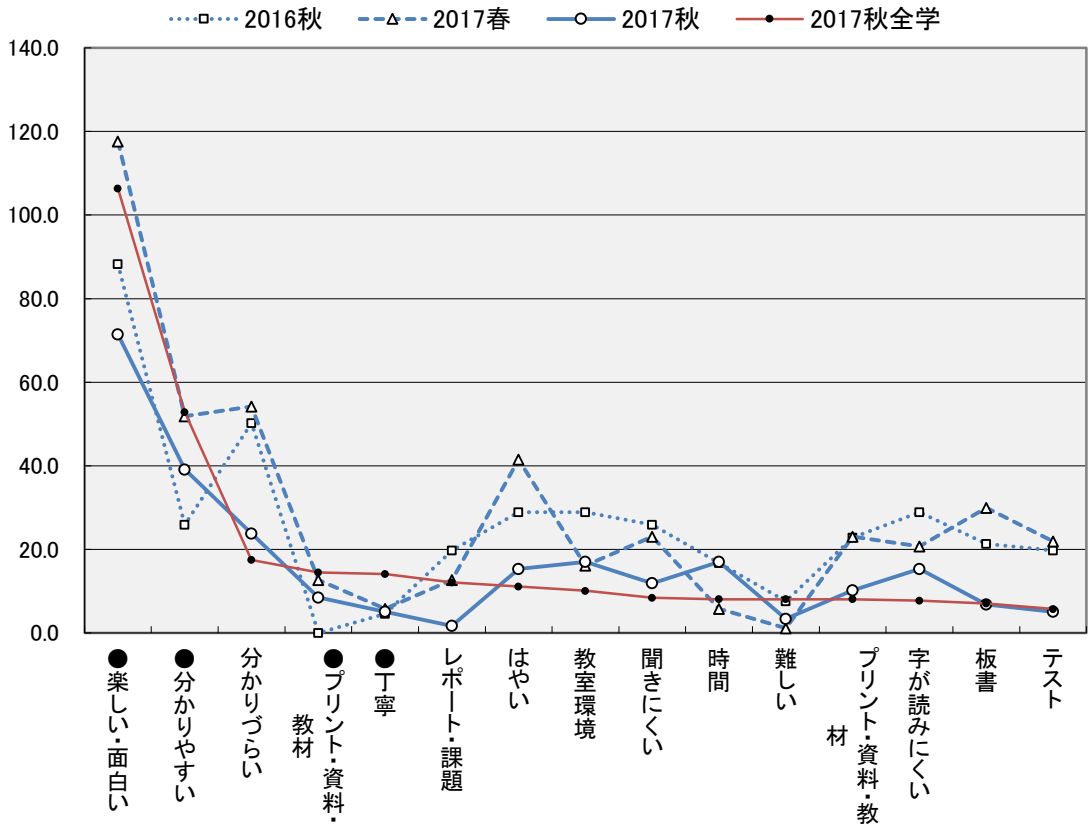


《28～81人》



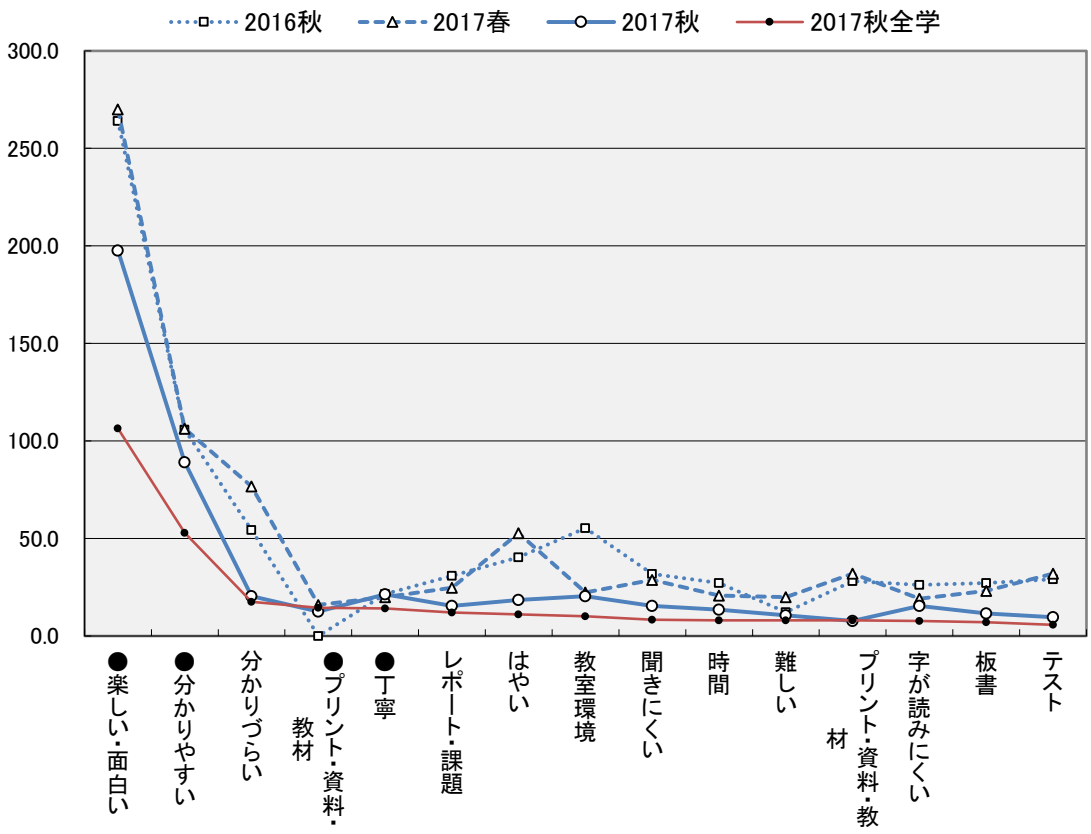
自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 回答人数帯別

《82人～》

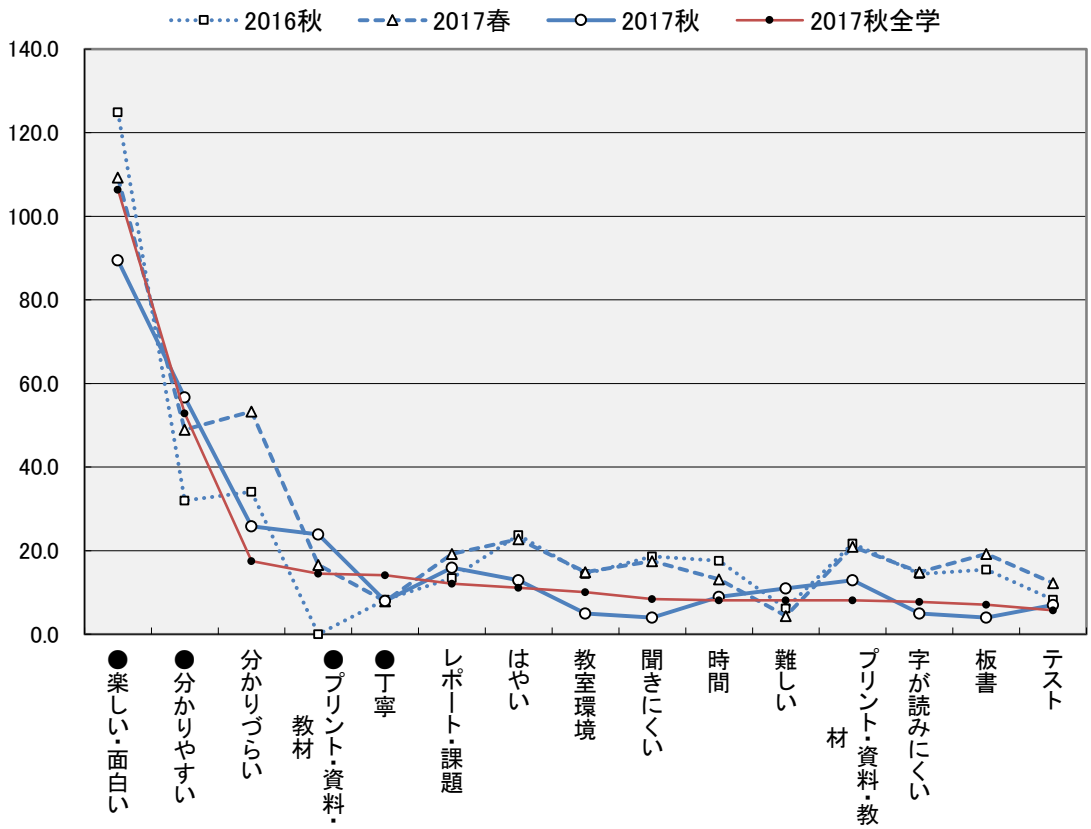


自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 学年別

《1年》

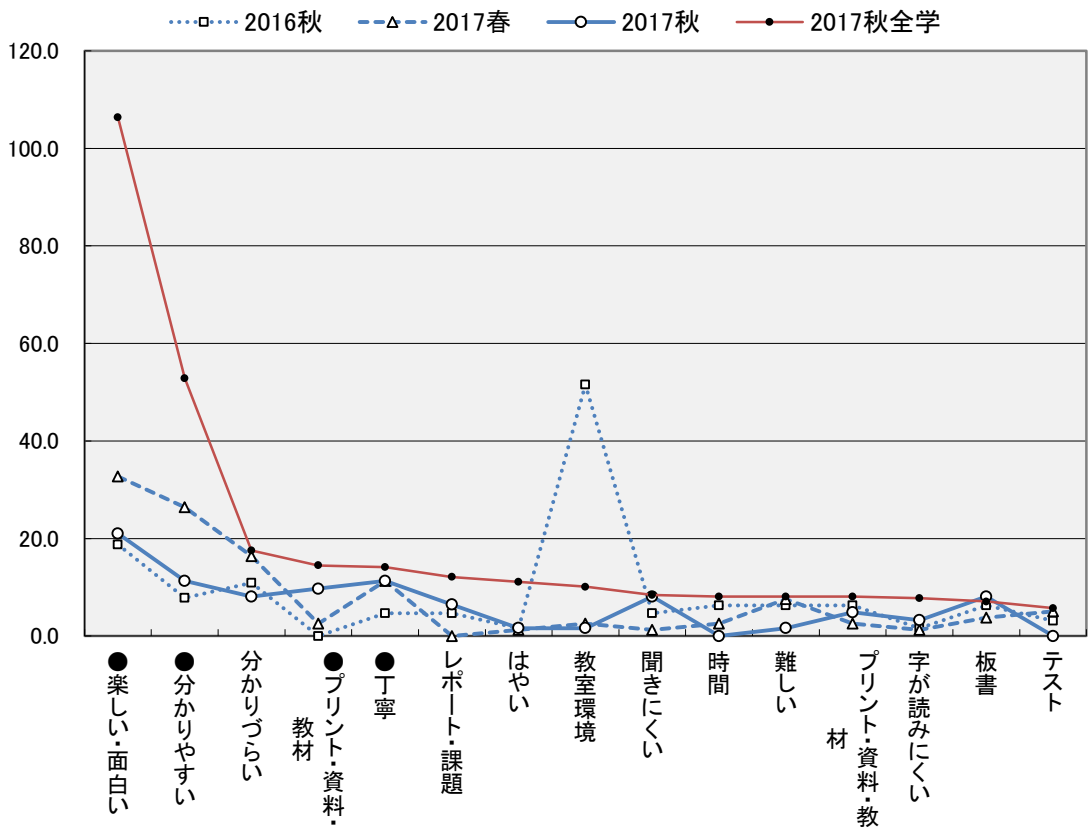


《2年》

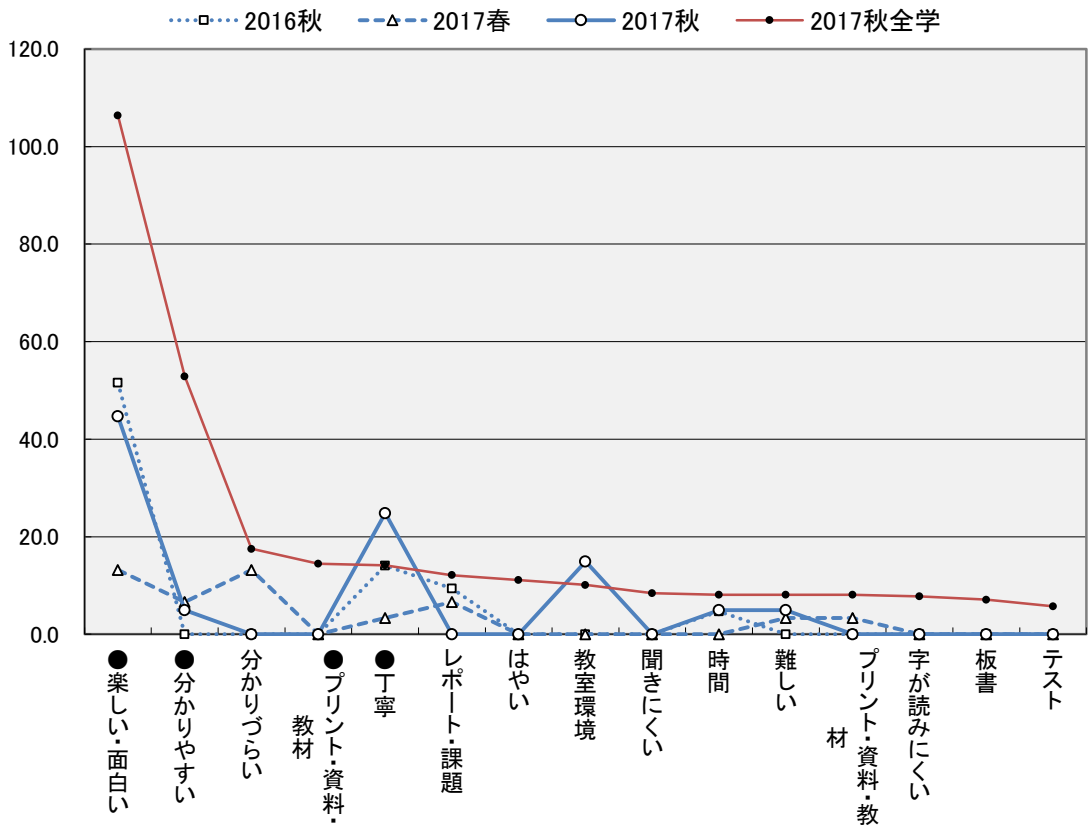


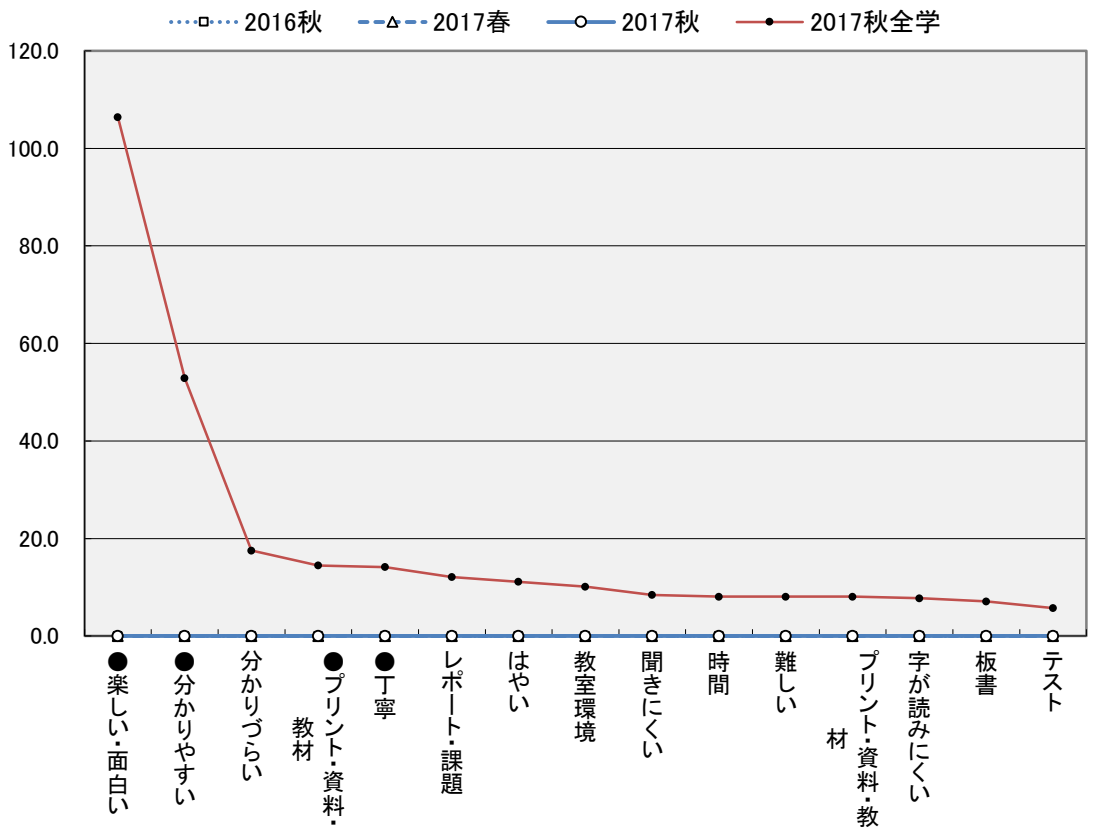
自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 学年別

《3年》



《4年》



自由記述回答　頻出キーワード
【出現率前回比較】 学年別

《その他》